

Ⅱ. 史跡の現況

1. 史跡の概要

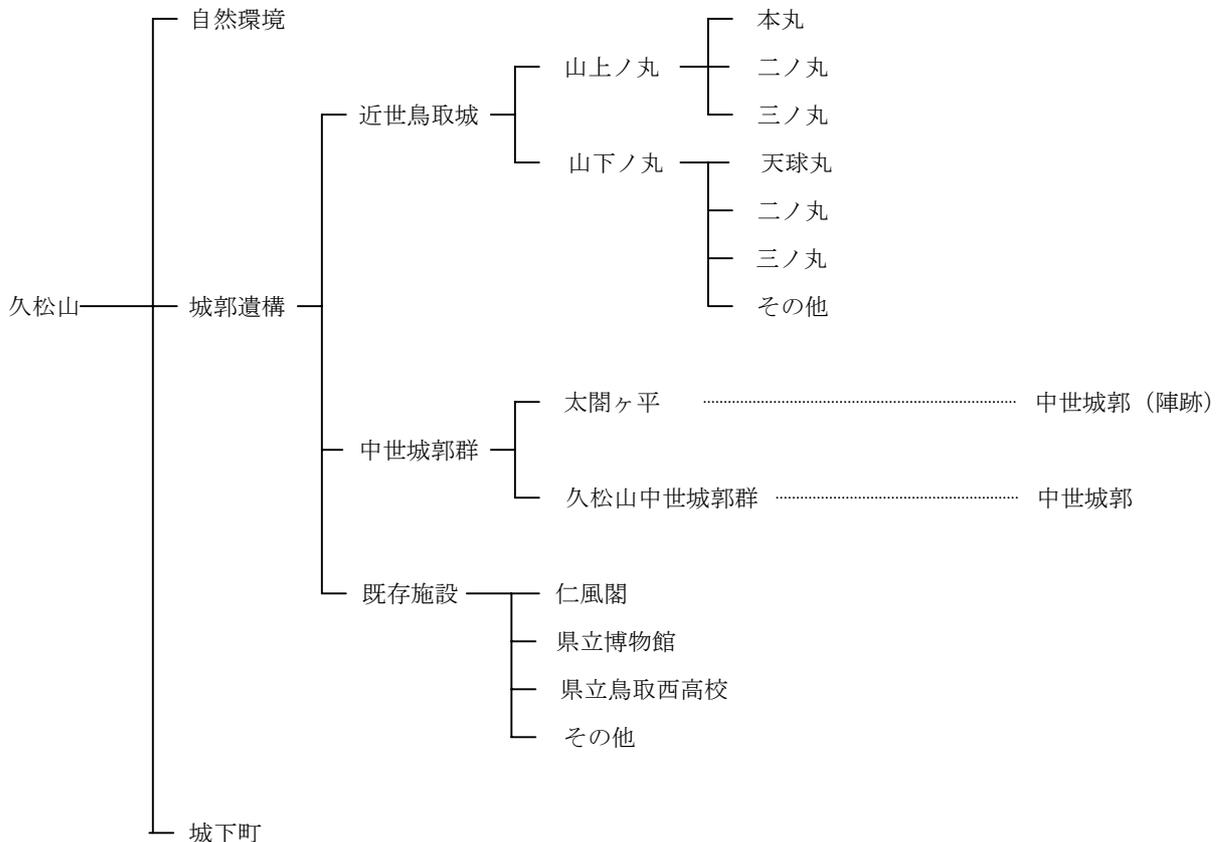
1) 史跡の概要

- 史跡指定年月日 昭和 32 年 12 月 18 日 668,663 m²
- 史跡拡大指定年月日 昭和 62 年 8 月 10 日 968,324 m²
- 構成
 - A 近世鳥取城
 - 種別) 平山城
 - 縄張) 梯郭式
 - 構成) 山上ノ丸・山下ノ丸
 - B 久松山中世城郭群 及び太閤ヶ平
 - 種別) 中世城郭・陣跡

久松山には、中世城郭群と近世鳥取城という、年代の異なる遺構が残されている。

前者及び太閤ヶ平は中世末から関ヶ原合戦までの、豊臣秀吉による鳥取城攻略を含む状況を反映した遺構であり、後者はそれ以降、江戸時代の藩主の居城として整備されたものである。山上ノ丸の存在は、両者の連続性を示している。

鳥取城跡附太閤ヶ平は、新旧の遺構が連続的・重層的に残り、城郭の発達史を一山で概観できる史跡として高く評価され、国指定史跡として指定された。



2) 位置と地形

史跡鳥取城跡が位置する標高 263m の久松山は、中国山地に水源をもつ千代川及びその支流によって形成された沖積平野である鳥取平野の東北側に位置する。久松山頂の天守跡からは、鳥取平野の大半及び日本海・砂丘まで、周辺地域を見渡すことができる。また、反対に、周辺地域のほとんどの場所から、この山の姿を見ることができる。

久松山の南西側（前面）は、かつては袋川が蛇行して流れ、低湿地を形成していたと考えられている。鳥取城築城に伴い、袋川流路の変更などによってこの低湿地が開発され、現在の鳥取市街地の原型となる城下町が形成された。このような成立のため、昭和初期に千代川及び袋川が河川改修を受けるまで、城下町は度々洪水に襲われた。

久松山の北西には雁金山へと尾根が続き、さらに谷を挟んで丸山が並ぶ。東には羽柴秀吉が鳥取城攻めの際に本陣を置いた本陣山（太閤ヶ平）が続く。久松山の北東（背後）は円護寺谷に向けて急角度の斜面となって落ち込んでいる。散見される関係遺構群からは、羽柴軍と吉川経家軍の対峙状況も偲ばれる。

鳥取城から、日本海に面した賀露港は、約 10km の距離である。また、因幡山名氏が本拠とした布施(布勢)天神山城跡も、約 10km の距離にある。

(『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』(平成 9 年)より抜粋・補足)



史跡鳥取城跡附太閤ヶ平位置図

3) 自然

□地質

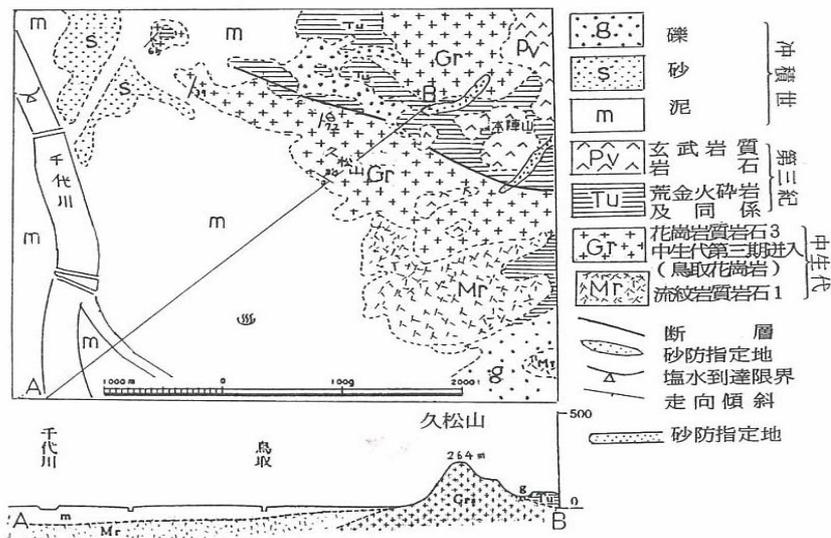
久松山地区の山地は、北西から南東に走る断層によって、南北両山地に分断されている。久松山を含む南部山地は、基盤をなす中生代の流紋岩中に進入した鳥取花崗岩からなり、緩斜面の山頂をもつ山地群を構成している。しかし主峰久松山（標高 263m）は、これらの群峰より一際高く屹立して残丘状の孤立峰をなし、その東南斜面には断層鏡面をおもわせる露岩面がみられ、西・南麓一帯には 40 度以上の急斜面が発達している。この急斜面は、久松山山麓よりさらに雁金山～丸山の線に続き、軍事的には格好の防禦線を構成している。久松山から流出する栗谷川等の水系の水源は、豊かな植生と湧水等により涵養され、貯水を可能とし、歴史的には城域内や城下町の用水源として機能してきた。

久松山麓の南西部に展開する千代川と袋川の合流地帯は、千代川自然堤防帯の後背湿地と袋川の蛇行河道跡の湿地帯からなり、軍事的には人馬の渡渉を阻む絶好の防禦帯をなしている。布施(布勢)天神山城にかわり、久松山を本城の立地として選んだのは、以上に挙げた地形的条件に起因するところが大きい。

一方、史跡太閤ヶ平（標高 249m）は、荒金火砕岩層を貫いて噴出した玄武岩質岩石からなり、断層沿いに発達した谷を隔てて屹立している。この山頂が秀吉の鳥取城攻撃の拠点とされた一因は、傾斜の比較的緩やかな側面より鳥取城を攻撃する利点によったものと解される。

土壌の分布は母岩や傾斜・乾湿と関係が深い。花崗岩や玄武岩を母岩とする山頂部やその山腹部には乾性褐色森林土壌が、また下方の山腹斜面には褐色森林土壌が分布する。一般に南斜面の急傾斜面では、土壌の流亡が大きいいため風化土層が薄く、後述の植生との関係が大きい。

（『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画策定報告書』（昭和 59 年）（以下『保存管理計画』より抜粋・補足）



表層地質図（『保存管理計画』より抜粋）

□植 生

久松山の森林は、大きく自然林と植林に分けることができる。さらに、自然林は極相林と二次林からなる。極相林としてはスダジイからなるシイ林があげられる。これは、かつて久松山斜面のほとんど全域に優先的に存在し、このシイ林が久松山の潜在植生であると考えられる。また、このシイ林は山頂近くや北側斜面上部などではブナ林の要素を交えている点に特徴がある。他には、山頂付近・尾根上部などにみられるアカガシ林、北斜面の小尾根や南斜面下方にみられるアカマツ林の一部が極相林的なものとみられる。

二次林には、アラカシ林、アベマキ林、アカマツ林がみられる。これらの多くは伐採や山火事の跡、古い崩壊跡などに生じたものと思われる。

タケ類のうち、山頂付近のヤダケはシイ林やカシ林の下生えとして極相林を構成する一部である。同じく山頂付近のメダケ林も崩壊部を示す二次林であり、これら2種は雑草的な異分子ではない。これらの植生は、土壌の浅い急斜面の多い久松山の崩壊を防ぐ防御柵の役割を果たしているものと思われる。

貴重植物としてはトキワイカリソウ、ウラジロイカリソウの分布が知られる。植林としては、スギ・ヒノキ・アカマツが見られ、また、モウソウチク・マダケも挙げられる。
(『保存管理計画』より抜粋・補足)

□動 物

久松山には、イノシシ・タヌキ・ノウサギ等の野生動物も生息しているものと思われる。天然記念物のキマダラルリツバメチョウが生息し、蝶ではほかにもヒサマツミドリシジミの生息地である。また、両生類のカスミサンショウウオが発見されたこともある。久松山は、これらの生物の生息を可能にする、豊かな自然環境である。

(『保存管理計画』より抜粋・補足)

□久松山自然環境のまとめ

久松山の山体は残丘状で、山頂、水道谷川（東坂道）沿いや「城門山上ノ丸跡」の東方に緩傾斜地もあるが、南・西・北側の山腹斜面は急傾斜で、平均斜度約 31～42 度となっている。これらの急斜面、特に南面では土壌の浅いところが多く、また、基岩を露出して崩壊しつつあるところさえもある。また、正面（南斜面）路上部、標高 235m 付近や東坂の中途「ひょうたん池」西方の標高 115m 地点などに「井戸」や湧水池もみられる。これらの湧水は山地溪谷の「源頭」にあたるものであって、その位置や湧水量がその山体の地層・岩盤の状態を示す手がかりとなり、また、豪雨時などに土砂の崩壊流失の「引き金」になることも知られている。

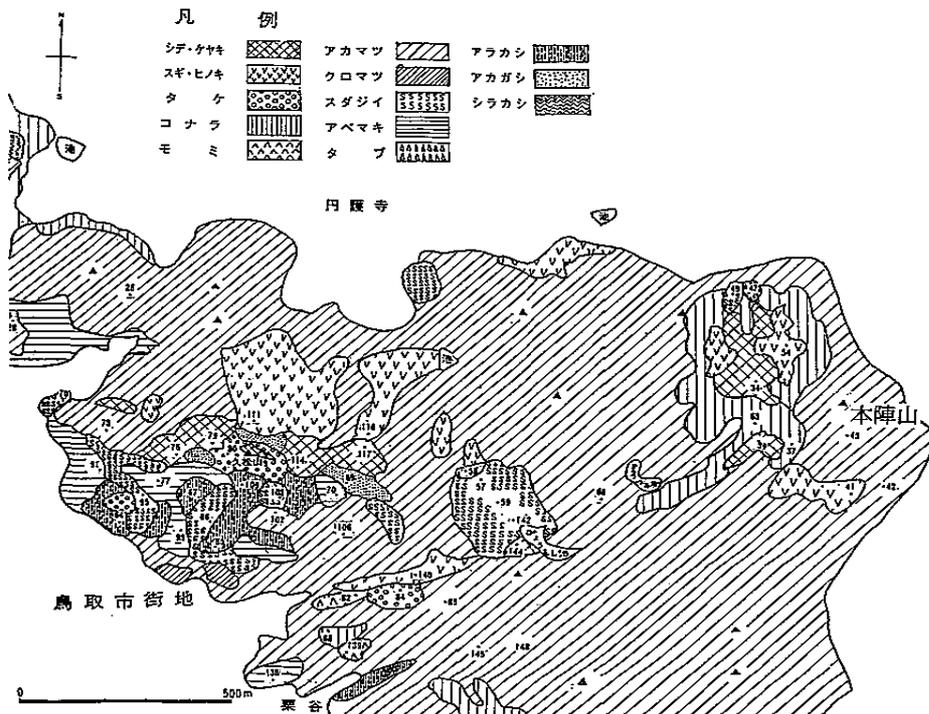
このような久松山の急斜面は、そこに植生がなければ、土壌が自然に崩壊したり流出したりするか否かの限界があるいはそれ以上の急傾斜なのであって、その植生はこの山を守る唯一のかけがえのない自然の防護柵の役割を果たしていることになる。また、例えば南斜面では、円頂部の下端にあたる「井戸」の位置が、やや南に傾いた岩盤（あるいは不透水層）の面であって、この線から上の「土」の部分が豪雨時に小規模な崩壊・流失（昭和 51 年は大規模）

を繰返してきたものであろう。

以上に述べた植生の現状・地形・土壌・湧水地と植生との関連などを考慮し、昭和 59 年の保存管理計画では、以下のように計画されている。

- イ、植生林といえどもむやみに伐採はしない
- ロ、二次林といえども、保護育成こそすれ、伐採を控えるべきである
- ハ、南西～南～東側斜面の極相林的自然林の多い森林は天然記念物に指定すべきである
- ニ、北～北西側斜面の植生林や二次林を主とする森林は保安林に指定して保護することが必要である

(『保存管理計画』より抜粋・補足)



森林植生図 (『保存管理計画』より抜粋)

4) 法規制・土地所有管理区分

□法規制

鳥取城跡は昭和 32 年に国史跡に指定された。また、鳥取市都市計画によると市街化調整区域内都市計画公園及び、県立博物館・県立鳥取西高校部分は市街化区域の第 1 種住居地域に指定されている。

鳥取城跡の法規制は以下の様にまとめられる。

史跡内法規制区分表

地区区分	規制区分	国史跡指定	都市計画区域			
			市街化区域		市街化調整区域	
			第 1 種住居地域	都市公園	指定なし	
山下ノ丸	県博	○	○			
	県立鳥取西高					
	その他	○	○	○		
久松山 (山上ノ丸)	山下ノ丸側	○			○	
	円護寺側	○				○
太閤ヶ平		○				○

上記の法規制の中では「文化財保護法」(史跡指定)が優先される。

なお、計画地周辺の用途地域区分は、史跡西側は鳥取駅を越える付近までが近隣商業区域、商業区域、久松山山麓は第 1 種低層住居専用地域、住居地域に指定されている。

また、山下ノ丸を除く久松山の南東面は、保安林(土砂崩壊、風致)及び鳥獣保護地区(特別)に指定されている。加えて、鳥取市指定の久松山山系景観保全地域には、久松山山頂、山下ノ丸側、太閤ヶ平が含まれている。

□土地所有管理区分

① 土地所有区分

史跡指定地は、鳥取市市有地(約 97%)が大半を占めている。山下ノ丸北西側には、鳥取県立博物館が位置しその土地及び建物とも鳥取県が所有・管理している。太閤ヶ平は、全域が国有地である。

② 土地管理区分

城郭部分は、都市公園(久松公園)として市都市整備部が管理している。三ノ丸は県立鳥取西高校の敷地として鳥取県に貸与し県が管理している。山地の自然林・人工林は市農林水産部が維持管理している。

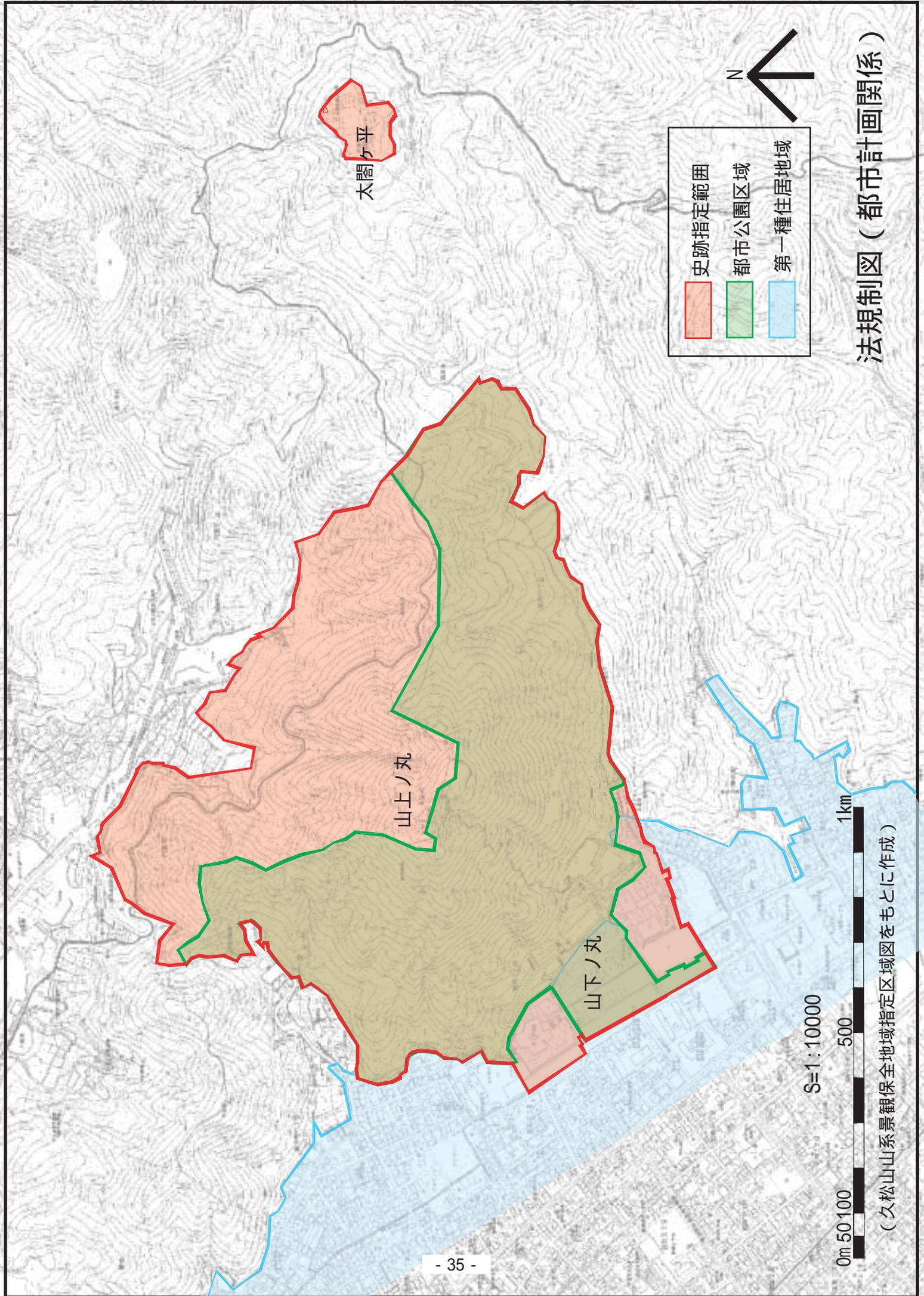
重要文化財仁風閣は市教育委員会が管理している。

また、飛地指定地の太閤ヶ平は、国有林として森林管理署が管理している。

土地所有管理区分表

面積	割合（所有別）	場所	地目	所有者	管理者	備考	
鳥取城跡 954,380.960 m ² 98.560%	県有地 14,348.960 m ² 1.48%	鳥取県立博物館	宅地	鳥取県	鳥取県		
		市有地	保安林・山林	鳥取市	鳥取市		
	鳥取城跡 954,380.960 m ² 98.560%	938,962.000 m ² 96.97%	久松山	保安林・山林	鳥取市	鳥取市	
			仁風閣	宅地	鳥取市	鳥取市	
			鳥取県立鳥取西高校	宅地	鳥取市	鳥取県	
			西高校グラウンド	学校用地	鳥取市	鳥取県	
			天球丸	公園	鳥取市	鳥取市	
			武器庫跡	公園	鳥取市	鳥取市	
			二ノ丸	公園	鳥取市	鳥取市	
			右膳之丸	雑種地	鳥取市	鳥取市	
			米蔵跡	公園・宅地	鳥取市	鳥取市	
			久松公園	公園	鳥取市	鳥取市	
			内堀	溜池・宅地	鳥取市	鳥取市	
			史跡内民家	宅地	個人	個人	
民有地 1,070.000 m ² 0.11%							
太閤ヶ平 13,943.400 m ² 1.44%	国有地 13,943.400 m ² 1.44%		保安林・山林	国有林	森林管理署		
968,324.360 m ²	100.00%						

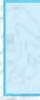
法規制における「鳥取市」は「教育委員会（文化財課）」「都市整備部（公園街路課）」「農林水産部（林務水産課）」で分担管理

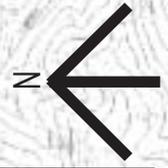


太閤ヶ平

山上ノ丸

山下ノ丸

	史跡指定範囲
	都市公園区域
	第一種住居地域



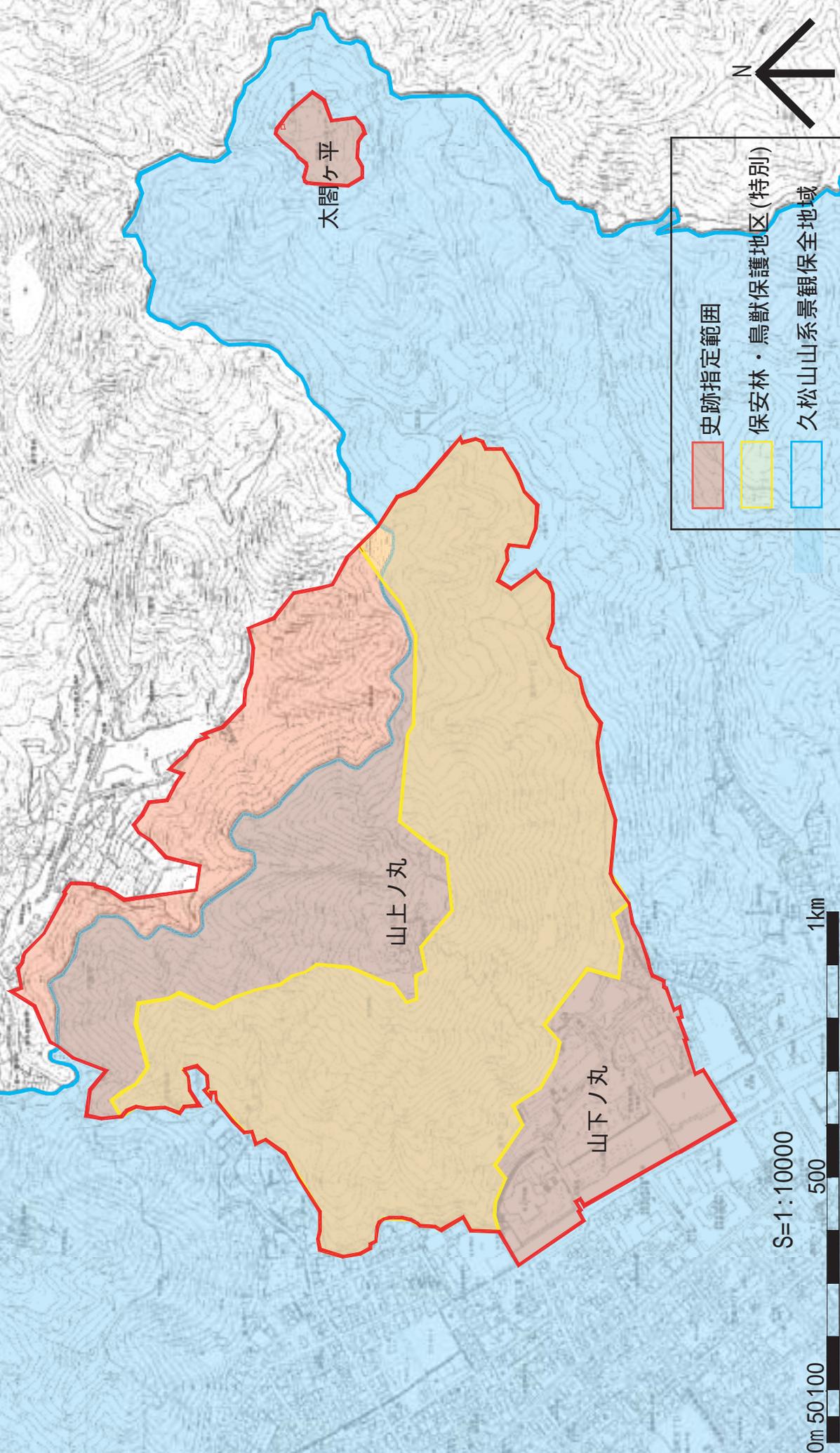
S=1:10000



法規制図（都市計画関係）

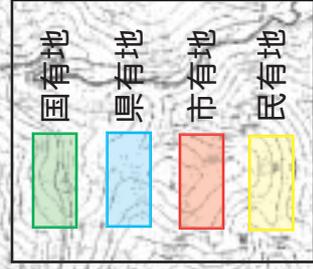
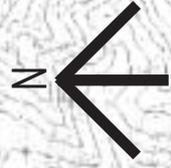
（久松山山系景観保全地域指定区域図をもとに作成）

法規制図（林野・鳥獣・景観関係）



(久松山山系景観保全地域指定区域図をもとに作成)

史跡範囲所有図



太閤ヶ平

山上ノ丸

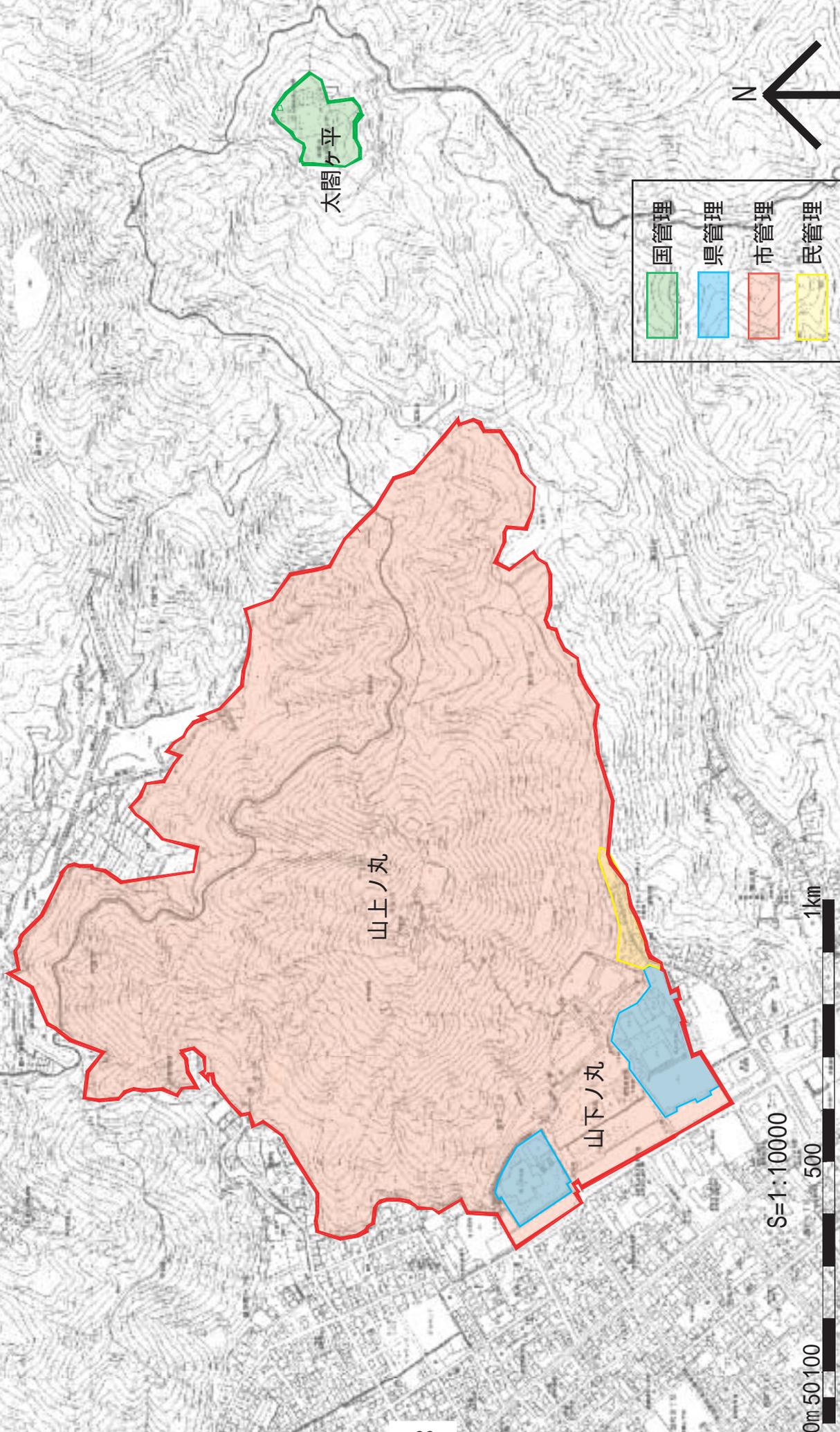
山下ノ丸

S=1:10000



(久松山系景観保全地域指定区域図をもとに作成)

史跡範囲管理図



(久松山山系景観保全地域指定区域図をもとに作成)

2. 歴史条件

1) 鳥取城の構成

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平は、久松山に位置する近世城郭「鳥取城」と、久松山に存する中世城郭遺構群、及び谷をはさんで東に位置する本陣山山頂の「太閤ヶ平」で構成されている。「太閤ヶ平」は、羽柴（豊臣）秀吉が鳥取城攻略戦（史上有名な「鳥取の渴え殺し」）の際に本陣を置いた場所である。

近世城郭としての鳥取城は、大きく分けて中世に原形の築かれた「山上ノ丸」と、山麓の「山下ノ丸」から構成されている。「山上ノ丸」は本丸・二ノ丸・三ノ丸で構成され、かつては本丸に天守櫓が建てられていた。「山下ノ丸」は天球丸、二ノ丸、三ノ丸、城代屋敷跡等と、その他諸郭から構成され、堀によって城下と区分されている。そして、久松山の眼下には城下町が広がっていた。

□ 山上ノ丸

山上ノ丸は久松山の山頂を数段に大きく切りひらき、その周囲を石垣で囲って、平坦化したものである。一段高い本丸の西北隅を更に高く石積して天守櫓を設けている。天守は、はじめ三層であったが、長吉のとき二層に改めたという。この天守はその後元禄5年に焼失し、再建されることはなかった。本丸には、その他、車井戸、着見櫓、多聞櫓とそれをつなぐ走櫓が設けられており、これらの建物は幕末まで残った。山上ノ丸には本丸の他、東側の二ノ丸・三ノ丸、西側の出丸が設けられている。この出丸から西の尾根を下ると、鐘ヶ平、太鼓ヶ平、松ノ丸などの郭の遺構が原生林に埋もれて残っており、池田長吉による造営以前には、この西尾根が久松山鳥取城の中心部を形成していたものと思われる。

□ 山下ノ丸

山下ノ丸は、近世鳥取城の中核である二ノ丸・三ノ丸・天球丸を中心とする諸郭で構成されている。二ノ丸を本丸、三ノ丸を二ノ丸と呼んだ時期もある。

これらの郭の基本構成は、従来池田長吉時代に整えられたものと考えられてきたが、近年、天球丸の修理事業の際に下層から古い石垣が出土しており、光政時代・光仲時代にもかなりの拡張整備が行われ、現在の郭構成の基本ができ上がったものと思われる。内堀より大手筋を中心に三ノ丸・二ノ丸・天球丸という主要な郭が階層をなして築造されており、久松山を背景に、中世城郭由来の山上ノ丸と一体となった城郭景観を構成している。

二ノ丸は山下ノ丸の中心部に位置し、高石垣をめぐらし、三階櫓・菱櫓・走櫓などの櫓群と御殿が所在していた。当初は藩主の居館であり、藩政の拠点であったが、後に実際の機能は三ノ丸に移された。元禄年間に山上ノ丸の天守が焼失した後は、南西隅の三階櫓が象徴的な役割を果たした。幕末期、一時御殿が再興されたが、ほとんど使われることなく放棄されたようである。櫓群は明治維新以降も残り、明治10～12年に陸軍省によって解体されるまで存していたため、幾葉かの写真が残されている。

現在鳥取県立鳥取西高校が所在している三ノ丸は、近世中期以降の鳥取城の中核であり、重臣が評議した走櫓や藩主の居館が設けられた場所である。享保の大火以降、鳥取城の機能

の大部分は三ノ丸に集約されていた。幕末期の拡張で大手筋の構造が大幅に変更され、三ノ丸より上の郭に向かう導線が極端に狭められたことから、三ノ丸の役割を知ることができよう。この郭の左翼部分の石垣は、未だ近代の修復を受けていないものと思われ、当初の姿を知ることのできる重要な石垣である。

二ノ丸の東北の一段高い場所にある天球丸は、池田長吉の姉・天球院の居館が置かれた郭である。三層の櫓が描かれている絵図があるが、享保の石黒火事で焼失したとみられるこの櫓の築造年代は不明である。岡山大学附属図書館所蔵の鳥取城下絵図（元和5年）や鳥取県立博物館所蔵の「元禄以前鳥取城下図」等、郭は描かれているが櫓の描かれていない絵図も見られる。近世中期以降、この郭はあまり利用されていなかったようである。非常に複雑な石垣構成を持っており、近世鳥取城の整備過程の一端を知ることができる。

以上のように、山下ノ丸は、近世城郭としての鳥取城そのものというべき存在であるが、明治の廃城令により建造物はほとんどすべて解体撤去されている。その後、公園や学校などとして利活用されたため、現在では縄張や全体像が不明瞭になってしまっている。

□ 山腹の中世城郭群

近世鳥取城に関する主要な城郭遺構は、古絵図、文献等の歴史資料や、史跡公園として活用されているなかでよく知られているが、その他に久松山の山腹には一般にはあまり認識されていない城郭関連遺構が数多く残っている。これらのほとんどは、山上ノ丸が鳥取城の中心であった近世初期の頃までに構築されたと思われるもので、それは山腹の斜面を削り出して平坦部を形成したものである。

これらの遺構の配置状況を概観すると、山頂に至る主要な尾根を中心に構築されている。東坂道周辺、中坂道周辺、西坂道周辺及び雁金山・丸山へ尾根伝いに結ぶ久松山北面の尾根周辺等に集中してみられる。このうち西坂道周辺部のものは、初期の鳥取城の主要部として活用されていたものであり、古絵図にも記されている「松ノ丸」「太鼓ヶ平」「鐘ヶ平」などに符合する遺構が明確に残っている。

また東坂道中途のひょうたん池付近にも大規模でまとまりのある遺構群がある。これには井戸跡 2ヶ所、石敷の通路、土塁を伴う郭などもみられ、当時鳥取城の重要施設のあったことをうかがわせるものであるが、これに関する文献資料はなく、遺構の示す性格については現在では不明である。

2) 鳥取城の変遷

鳥取城は、戦国時代、天神山城を拠点に因幡を治めていた山名氏によって、久松山の頂に作られた出城を起源とするといわれている。

その出城を因幡山名氏配下の武将・武田高信が強固なものに改造し、ここを拠点に、山名氏に反逆した。武田高信は一時因幡山名氏を追い落とすことに成功するが、結局山名豊国のために追われた。豊国は鳥取城に、天神山城の建物を移築し、本拠とした。しかし羽柴(豊臣)秀吉との戦いの中で、同盟を結んでいた毛利方を裏切って降伏したため、家臣に追放された。

かわって毛利方の武将・吉川経家が鳥取城に入ったが、籠城戦の末、秀吉に敗北して切腹した。その後、秀吉配下の宮部継潤が城主となったが、関ヶ原の戦いで西軍についたために、東軍の池田長吉が、慶長5年(1600)改易地6万石を与えられて鳥取城主となった。長吉は、慶長7年から4～5年かけて鳥取城の大整備を行い、それまで三層だった山上の天守を二層に建て替えたほか、山下の天球丸・二の丸・三の丸を作り上げたため、それ以前をはるかに越える規模となった。

鳥取城は、池田光政、ついで池田光仲にはじまる鳥取池田家に引き継がれ、32万石の大藩の拠点にふさわしい大城郭となった。

①久松山の城郭の創始

従来、久松山に初めて城が築かれたのは、従来『因幡民談』の記述等から、天文14年(1545)頃と考えられてきた。現存する遺構の上限年代が明らかにされていないため、今後、研究を進める必要がある。

16世紀中頃の因幡の政治状況をみると、因幡の守護は、鳥取平野の西方に位置する湖山池東岸の布施天神山城を本拠とする山名氏であった。この因幡山名氏は惣領家但馬山名氏の同族である。しかし、因幡、但馬の両山名氏は、因幡における支配権力をめぐって鋭く対立していた。この対立の中には出雲月山富田城を本拠とする尼子氏の勢力拡大による因幡地方への影響も大きく絡み合っていた。天文10(1541)年岩井表の合戦をはじめとして、以後両山名氏の対立抗争は続いたが、この争いの過程でその戦略的要素である千代川右岸の久松山に砦として城が築かれた。この城については「山の形嶮岨にして、八葉の谷尾をわけ四方ははしく切り立ちたる事、宛も工匠けづり成せるに異ならず。一略一その高さ万仞にして、周りは二、三里に及べり。あたりに双びの山なく、咫尺に千里の地をしじめ一国の山川唯眼の下に明らかなり。」(『因幡民談』)とあるように、戦略的拠点として良好な立地条件を備えた場所であった。こうして布施天神山城の出城としての鳥取城が成立したという。

②中世城郭群

久松山の中世城郭群については、これまで本格的な学術調査がなされてきていない。高橋正弘『因伯の戦国城郭一通史編一』（私家版, 1986）の他、先駆的な業績としての吉田浅雄「羽柴秀吉の天正鳥取陣営跡之圖」があり、近年鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査報告書第1集 因幡編』に記載された程度である。久松山の城郭遺構群には、山名期・武田期のもの、羽柴秀吉の鳥取城攻めに際して造営されたもの、それ以降のものが混在していると思われるが、それぞれの遺構の正確な状況把握はできていない。太閤ヶ平と関連の深い、史跡指定地外の久松山周辺の陣跡も含め、今後詳細な調査を行う必要がある。また、尾根沿いに郭に上がる道筋の想定されている「東坂道」「西坂道」などについても、確認調査が必要であろう。

近世鳥取城においても天守として扱われた山上ノ丸も、山名豊国が布施天神山城より三層の櫓を移築したとも言われるが、現状との関連はよく分かっていない。

中世城郭群の分布や状況把握は、近世鳥取城の初期プランを考えるためにも、また、羽柴秀吉と吉川経家の対陣状況を知る上でも、きわめて重要である。また、以降の保護のためにも、全体像の把握は急務である。

③近世の鳥取城

天正9年（1581）因幡を平定した秀吉は、配下の宮部継潤を鳥取城主とした。宮部継潤は鳥取城のある程度の整備を行ったものと思われるが、詳細は不明である。後代の池田長吉時代の造営が莫大なものであったと伝えられることから、さほど大規模なものではなかったと思われる。

従来、『因幡民談』の記述などから、近世鳥取城の現在の姿の基本を作り上げたのは、関ヶ原の合戦の後城主となった池田長吉であるとされてきた。長吉は山上の天守を二層に建て替え、山下の二の丸・天球丸、内堀の造営を行ったと考えられる。しかし、岡山大学附属図書館所蔵の元和5年の城下絵図や、慶安以前と考えられる鳥取県立図書館所蔵の鳥取城下絵図などを見ると、長吉の整備は、必ずしも近世城郭として鳥取城を完成させたものではなかったとも考えられる。やはり池田光政、池田光仲による整備を経て、基本的な縄張りが完成したと考えるべきであろう。

池田長吉の後、鳥取城は、因伯2国の太守となった光政、それにかわって領主となった光仲を初代とする鳥取池田家によって継承された。元禄頃までには山上の天守・天球丸の三階櫓・二ノ丸の三階櫓が全備した、壮麗な城郭となった。山上の天守は檜皮葺またはこけら葺の二層のものとして描かれている。

この姿はしかし、比較的短期間で失われた。元禄5年には落雷で山上の天守が焼失し、以後再建されなかった。次いで享保5年の大火で城内の建造物のほとんどが失われ、天球丸の三階櫓は再建されなかった。二ノ丸の三階櫓は再建されて、以後天守的な役割を果たすことになる。

郭の役割も、近世を通じて様々に変化していった。当初は城内にも武家屋敷があったが、これは後に城外に出された。二ノ丸にあった藩主の居所は、近世中期以降三ノ丸に移された。

二ノ丸・天球丸には象徴的な役割が与えられていたが、特に近世中期以降は、施設としては積極的に利用されなかったようである。天球丸については郭そのものの役割が史料上不明瞭な面もあり、今後さらなる研究が必要である。また、天守の再建されなかった山上ノ丸についても、城郭の一部として扱われている。

鳥取城の縄張そのものに大きな変更が加えられるのは、幕末になってからのことである。嘉永2年には二ノ丸の西方に郭を拡張し、万延年間には、大手筋の脇にあった宝蔵を三ノ丸に取り込み、大手筋そのものを、従来の三ノ丸を経て二ノ丸・天球丸に明快に続く道筋から、三ノ丸で一旦終息し、狭い道で二ノ丸・天球丸に向かうよう付け替えている。これが鳥取城の縄張の最終形態であり、いかに三ノ丸に主要機能が集中していたかを物語るものであろう。

近世鳥取城は、久松山の地形を利用し、中世由来の山上の天守を頂点に、階層上に郭を構成している。そのため、奥行きには欠ける面があるが、険峻な斜面に高石垣を築いて作り出される垂直方向への広がりには壮大なものがある。単に山城から平城への連続性をもつというだけでなく、基盤にある山城的な景観を活かした景観設計そのものにも、近世鳥取城の特質があるといえるだろう。

④廃城以降史跡指定まで

廃藩置県後も明治5年(1870)まで政庁の置かれていた鳥取城は、同年に行われた陸軍の調査の際には、存続する城郭としてあげられていた。その後、扇邸(現在の仁風閣の位置)が官舎として使用された他、明治10年には残っていた三ノ丸の建物を陸軍が改修して使用した記録が残されている。二ノ丸の櫓群や大手筋(登城路)の門櫓等、実用に適さない建造物は順次売却・解体され、明治12年(1879)までにはほぼ完全に撤去されたようである。この時売却された瓦・用材等は各所で転用されたといわれている。

陸軍省の管轄となっていた鳥取城跡は明治22年(1889)再び池田家の所有となった。この年、鳥取県立鳥取西高校の前身である鳥取県尋常中学校が三ノ丸に新築され、現在まで同地に所在することとなった。

仁風閣は、片山東熊の設計により、明治39年に扇邸跡に起工され、翌年竣工した。皇太子行啓の際には御座所となり、皇太子に随行していた東郷平八郎によって仁風閣と名付けられた。市民による保存運動の結果、昭和48年に国の重要文化財に指定されている。

池田家が二ノ丸跡及び米蔵跡等、城跡の一部を公園整備して一般開放したのは、大正12年のことである。現在鳥取県立博物館の立地する城代屋敷跡にも、鳥取市が大正13年に公設運動場を開設した。昭和初期には、久松公園は鳥取市の観光名所のひとつとなっていたが、昭和18年の鳥取大震災によって、このような状況にあった鳥取城跡も大きな被害を受けた。翌19年、池田家は鳥取第一中学校用地を含む鳥取城跡を鳥取市に寄付した。

第二次世界大戦終結に伴い、昭和20年には、宝隆院庭園などの鳥取城跡内に、進駐軍の官舎が設置された。

その後、昭和27年の鳥取大火を経て、昭和32年、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平として史跡指定を受けた。

□鳥取城変遷図及び幕末期想定縄張図について

鳥取城は戦国時代末期に布施天神山城の出城として山名氏によって築城され、配下の武田高信が反乱の拠点として整備したのち、山名豊国が天神山城の櫓及び城下町を移転して居城とした城が原形となっている。豊臣秀吉の支配下に入って以降は宮部継潤に、関ヶ原の合戦以後は池田長吉によって整備が進められた。池田光政を経て、鳥取池田家の祖・池田光仲の時期に一旦完成を迎えたものと思われる。しかし、近世光仲以前の変遷については資料が乏しく、地誌類等でわずかに様子を窺い知ることができるに過ぎない。

久松山中の中世城砦遺構の分布状況等を概観すると、現状の石垣の下により古い時代の郭遺構が現存している可能性は十分考えられるが、未調査である。以上のような状況から、比較的具体的な変遷図が描けるのは、池田光仲入府以降に限られる。

この変遷図は、現状の実測図に、鳥取県立博物館所蔵の『鳥取藩政資料』に含まれる石垣修理の際の幕府への申請図面、普請に伴う（または先立つ）積間図等を当てはめて再構成する方法で作成した。

三ノ丸の石垣の折れ曲がりについては、平面上のものではなく傾斜を表現したものであると解釈している（郭内部の段差表現などとの整合性から判断）。絵図間に若干の矛盾、表現上の疑問点などがあるが、今後遺構調査等を行って今後精度を向上する必要がある。また、現状の石垣と絵図の石垣の一致・不一致の確認も必要である。

しかし、ここで示した、鳥取城が当初大手筋（擬宝珠橋→中ノ御門→太鼓御門→三ノ丸・二ノ丸・天球丸）が明瞭なラインを形成していたこと、それが幕末期に三ノ丸の拡張にともなって崩され、現状に近い縄張り構成に変化したこと、それがほぼ現在も踏襲されているという大要は揺らがないと思われる。

鳥取城関連年表

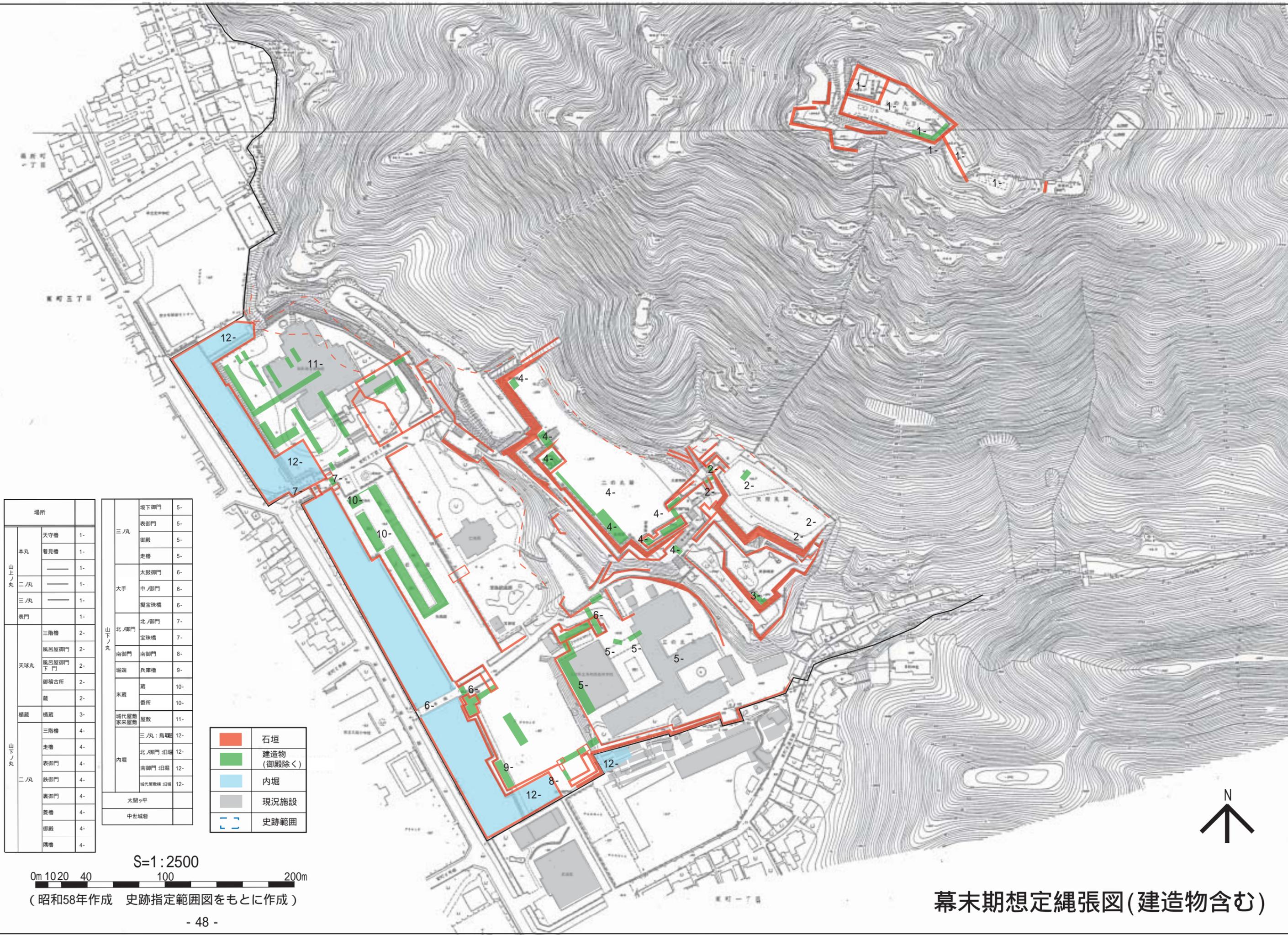
西暦	年号	できごと
1545	天文 14 年	この頃久松山に出城が築かれる
1562	永禄 5 年	武田高信が久松山を拠点として、当時因幡を支配していた山名氏に反逆
1573	天正元年	武田高信を逐った山名豊国、布施天神山城から久松山鳥取城に拠点を移す
1580	天正 8 年	豊臣秀吉の第 1 回鳥取侵攻。山名豊国、秀吉に降伏して鳥取城を出る
1581	天正 9 年	豊臣秀吉の第 2 回鳥取侵攻。吉川経家の籠城する鳥取城、落城
1582	天正 10 年	宮部継潤が鳥取城主となる
1600	慶長 5 年	関ヶ原合戦後、池田長吉が鳥取城主となる
1617	元和 3 年	池田光政が鳥取藩主となる
1619	元和 5 年	鳥取城下町拡張工事に着手
1632	寛永 9 年	池田光仲が鳥取藩主となる（鳥取池田家の成立）
1692	元禄 5 年	鳥取城天守閣焼失。以後再建されず。
1716	享保 1 年	三代藩主池田吉泰、鳥取城を大改修
1720	享保 5 年	石黒火事で鳥取城延焼
1721	享保 6 年	三ノ丸を中心に鳥取城が再建される（三年後に竣工）
1728	享保 13 年	二ノ丸の三階櫓、再建される
1843	天保 14 年	二ノ丸走櫓等が焼失
1846	弘化 3 年	前年より再建されてきた二ノ丸御殿、竣工
1849	嘉永 2 年	二ノ丸の西方を拡張
1863	文久 3 年	扇御殿が造営される
1879	明治 12 年	陸軍省による鳥取城の建造物の解体が完了
1889	明治 22 年	旧領主・池田家に城跡が返却される ・ 尋常中学校（現・鳥取県立鳥取西高校）が三ノ丸に新築移転される
1907	明治 40 年	扇御殿跡に仁風閣が建設される
1924	大正 13 年	鳥取公設運動場開設
1943	昭和 18 年	鳥取大震災による城跡石垣の崩壊
1944	昭和 19 年	池田家、鳥取城跡全域を鳥取市に寄贈
1949	昭和 24 年	県立鳥取西高校、鳥取高等女学校（明治 21 年創立）等と統合
1953	昭和 28 年	山上ノ丸に平和塔建設が計画されるが雁金山に変更される
1954	昭和 29 年	鳥取市、史跡指定申請書を文化財保護委員会に提出。鳥取県より史跡の仮指定。
1955	昭和 30 年	文化財保護委員会の現地調査
1957	昭和 32 年	史跡指定
1972	昭和 47 年	城代屋敷跡に鳥取県立博物館が開館
1984	昭和 59 年	保存管理計画策定
1987	昭和 62 年	史跡の追加指定

鳥取城変遷一覧表

期間	指標事項	建造物・曲輪状況
前鳥取城期	<p>天文14年(1545) この頃久松山に出城が築かれる。</p> <p>永禄5年(1562) 武田高信が鳥取城を増強する。</p> <p>天正1年(1573) 山名豊国、布施天神山城から久松山鳥取城に拠点を移す</p> <p>天正10年(1582) 宮部継潤が鳥取城主となる。城郭の整備をすすめる</p>	<p>＊中世城郭から織豊系城郭にかけての時代</p> <p>＊久松山及び周辺には中世城郭が点在</p> <p>＊鳥取城奪取後、山名豊国が天神山城から三層の天守を移築したという。</p> <p>＊宮部時代の曲輪構成は不明瞭。</p>
鳥取城第1期	<p>慶長5年(1600) 関ヶ原合戦後、池田長吉が鳥取城主となり、鳥取城を近世城郭として整備。</p>	<p>＊池田長吉による近世城郭としての整備</p> <p>＊岡山大学附属図書館所蔵の絵図(天保期の写本)に長吉造営前の曲輪構成が描かれる。</p> <p>＊池田光政時代までに、基本的な城郭の縄張りは定められた。</p> <p>＊山頂の従来三層だった天守を二層に改築(元禄時代まで存続)</p>
第2期	<p>元和3年～寛永9年(1617～1632) 池田光政が鳥取藩主となる</p>	<p>＊城下町造営と三十二万石の藩主の居城としての整備</p> <p>＊元和5年の絵図(岡山大学附属図書館)によれば、基本的な城郭構成はこの頃までに整っていたが、天球丸には三階櫓とその土台となる曲輪がまだ造営されていなかった。</p> <p>＊鳥取県立博物館所蔵の絵図類等から、天球丸の三階櫓造営は慶安3年以降と考えられる。光政入府頃の天球丸は御殿のみだったと思われる。</p> <p>＊年代不詳だが『旧壘 覧』の絵図に、天球丸に一層の櫓と二層の櫓を描くものがあり、出土した石垣と状態が類似する。光政時代の遺構である可能性がある。</p>
第3期	<p>寛永9年～享保元年(1632～1716) 池田光仲が鳥取藩主となる(鳥取池田家の成立)</p> <p>元禄5年(1692) 山上の天守、落雷で焼失</p>	<p>＊近世城郭としての完成期</p> <p>＊慶安3年以降、天球丸の三階櫓造営される。</p> <p>＊元禄頃には曲輪は拡張されていたが、櫓は建設されていなかった可能性が高い。</p> <p>＊天球丸の櫓台状石垣が光政期のものですると、この時期に腰石垣を巻いた上で石垣を現在の高さまで築き上げたと考えられる。</p>
第4期	<p>享保元年～享保5年(1716～1720) 三代藩主池田吉泰、三ノ丸を中心に鳥取城を大改修</p>	<p>＊三代藩主吉泰による政庁・居城機能の強化期</p> <p>＊三ノ丸が拡張され、城郭としての規模が拡大される。</p> <p>＊二ノ丸御殿を造営(享保4年落成・翌年焼失)</p> <p>＊絵図の天球丸の三階櫓、望楼型から層塔型に描写が変わる。櫓台の描写が変わる。</p>
第5期	<p>享保5年～天保14年(1720～1843) 石黒火事で鳥取城延焼</p> <p>享保6年(1721) 三ノ丸を中心に鳥取城が再建される(三年後に竣工)</p> <p>享保13年(1728) 二ノ丸の三階櫓、再建される</p>	<p>＊石黒火事による主要建物の焼失・再興鳥取城期</p> <p>＊石黒火事の際に残存したのは、山上の着見櫓と楯蔵・いくつかの門のみ。</p> <p>＊天球丸の三階櫓については、『鳥府志』には焼失との言及があるが、一次資料では現在確認できず</p>
第6期	<p>天保14年～嘉永2年(1843～1849) 二ノ丸走櫓・弓倉・槍倉が焼失</p> <p>弘化3年(1846) 前年より再建されてきた二ノ丸御殿、竣工</p>	<p>＊天保15年までに三ノ丸が一旦拡張される</p> <p>＊弘化期、二ノ丸に一次御殿機能が回復されるが、短期間で三ノ丸に戻る</p>
第7期	<p>嘉永2年～万延1年(1849～1860) 二ノ丸の西方を拡張</p>	
第8期	<p>万延1年～明治12年(1860～1879) 宝蔵部分を削平し、三ノ丸を現在の範囲に拡張</p> <p>明治12年(1879) この年までに鳥取城の主要建物が取り壊される</p>	<p>＊鳥取城としての最終形態</p>

鳥取城変遷図

<p>第3期 寛永9年～享保元年(1632～1716)</p>	<p>第4期 享保元年～享保5年(1716～1720)</p>	<p>第5期 享保5年～天保頃</p>
<p>山上の天守、天球丸、二ノ丸が全備した状態。 山上の天守は二層の檜皮葺。光政・光仲期の様相と思われる。</p>	<p>元禄年間に山上の天守が落雷で焼失したのちの鳥取城の姿。 山上には着見櫓と門が見られる。天守は焼失しているが、焼失した天球丸・二ノ丸の櫓は描かれている。主に参考にした8の絵図は、石黒火事直後の損害状況を示したもの。</p>	<p>天球丸が再建されなかった享保5年以降の状況。 建造物の多寡に関わらず、全体構成は維持されている。</p>
<p>第6期 天保15年(1844)頃</p>	<p>第7期 嘉永2年～万延1年(1849～1860)</p>	<p>第8期 万延元年以降(1860～)</p>
<p>幕末期の三ノ丸の拡張前の状況を示す。 この時期までは、大手筋の明瞭さが堅持されている。 28は、従来主な参照図とされてきたもののひとつ。</p>	<p>三ノ丸・二ノ丸拡張後の縄張りを示す。この頃、藩主の居所等主要施設の集中していた三ノ丸に縄張りの主眼が移動し、二ノ丸・天球丸への導線が簡略なものとなっている。 43は最終的に縄張り変更した際の三ノ丸絵図。36は最終的に縄張り変更した二ノ丸の絵図。</p>	<p>天球丸石垣に不明点もあるが、三ノ丸拡張後、幕末期の縄張りを示す。 弘化・万延期の様相がおよそそのまま表されている。</p>



場所		
山上ノ丸	本丸	天守櫓 1-
		看見櫓 1-
		—— 1-
	二ノ丸	—— 1-
	三ノ丸	—— 1-
	表門	1-
天球丸		三階櫓 2-
		風呂屋御門 2-
		風呂屋御門下門 2-
		御積古所 2-
		蔵 2-
橋蔵	橋蔵	3-
山下ノ丸		三階櫓 4-
		走櫓 4-
		表御門 4-
		鉄御門 4-
		裏御門 4-
		要櫓 4-
		御殿 4-
		隅櫓 4-
		—— 4-

三ノ丸	坂下御門	5-
	表御門	5-
	御殿	5-
	走櫓	5-
大手	大鼓御門	6-
	中ノ御門	6-
	翼宝珠櫓	6-
北ノ御門	北ノ御門	7-
	宝珠櫓	7-
南御門	南御門	8-
堀端	兵庫櫓	9-
米蔵	蔵	10-
	番所	10-
城代屋敷	家来屋敷	11-
内堀	三ノ丸：鳥隠	12-
	北ノ御門 旧堀	12-
	南御門 旧堀	12-
	城代屋敷横 旧堀	12-
太閤ヶ平		
中世城砦		

	石垣
	建造物 (御殿除く)
	内堀
	現況施設
	史跡範囲

S=1:2500
0m 10 20 40 100 200m

(昭和58年作成 史跡指定範囲図をもとに作成)



幕末期想定縄張図(建造物含む)

3) 参考資料一覧表

資 料 名	年 代	所 蔵 場 所	資料番号等
『二ノ丸惣御絵図』		鳥取県立博物館	資料番号 895
『二ノ丸并御三階下通り御絵図面』		鳥取県立博物館	資料番号 911
『鳥取城三ノ丸絵図』		鳥取県立博物館	資料番号 914
『御城御破損所絵図』		鳥取県立博物館	資料番号 878
『因州鳥取之城之図』	文化7年写本	岡山大学附属図書館	
『鳥取城修覆願図』	1680年	鳥取県立博物館	資料番号 863
『鳥取城破損御修覆願図』	1683年	鳥取県立博物館	資料番号 864
『元禄年間以前鳥取城下大絵図』	1692年以前	鳥取県立博物館	
『鳥取城修覆願絵図』	1721年	鳥取県立博物館	資料番号 871
『鳥取城修覆願絵図』	1762年	鳥取県立博物館	資料番号 874
『鳥取城修覆願絵図』	1807年	鳥取県立博物館	資料番号 881
『鳥取城修覆願絵図』	1847年	鳥取県立博物館	資料番号 884
『鳥取城修覆願絵図』	1850年	鳥取県立博物館	資料番号 885
『鳥取城修覆願絵図』	1860年	鳥取県立博物館	資料番号 886
『御城御破損所絵図』	1860年	鳥取県立博物館	資料番号 879
『因幡国鳥取絵図』	1619年	岡山大学附属図書館	
『慶安以前鳥取城下之図』	1650年以前	鳥取県立博物館	
『雪窓夜話』	1744年頃成立		上野忠親
『鳥府久松山御城積間図』	1844年	鳥取県立博物館	大坪 宗武
『久松山二ノ丸御新造之図』	1846年	鳥取県立博物館	大坪 宗武
『因幡志』	1795年成立	鳥取県立図書館 鳥取県立博物館ほか	安陪 恭庵
『因幡民談』	1688年頃成立	大雲院・鳥取県立図書館 鳥取県立博物館ほか	小泉 友賢
『鳥府志』	1829年成立	鳥取県立博物館・鳥取 県立公文書館	岡島 正義
『鳥取都市計画概要』	1932年	鳥取市役所	

* 絵図以外にも鳥取藩政資料（鳥取県立博物館）を適宜参照した。
同年代の絵図が複数存する場合には、正本に近いと思われる個体を参照した。

* 昭和56年4月～12月に鳥取市教育委員会の実施した「鳥取城の関する文献資料並びに御三階櫓復元に関する調査」にあげられている資料も適宜参照した。

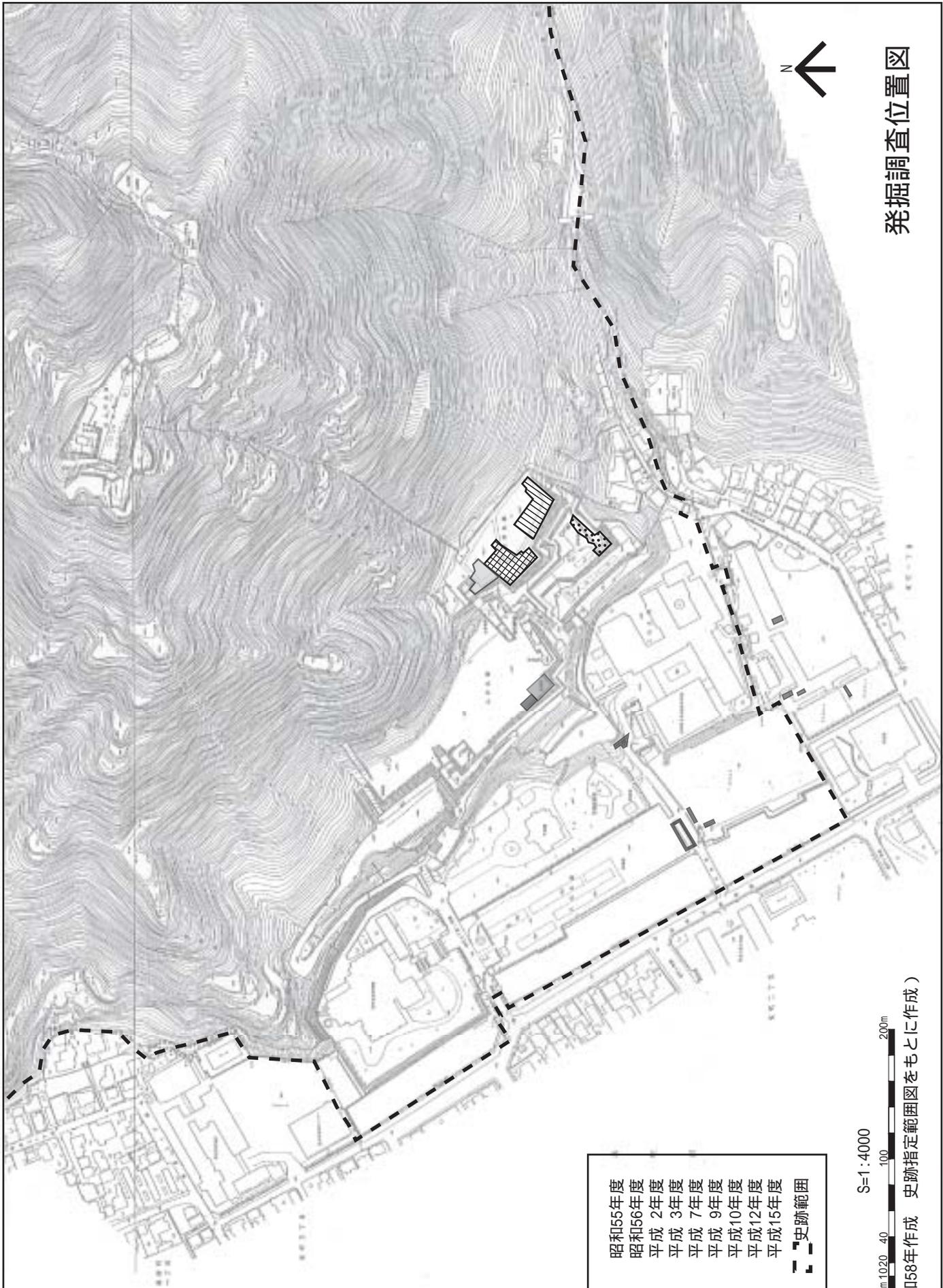
4) 発掘調査

発掘調査は現在まで9回に渡り行われているが、平成15年度を除いて、石垣修理に伴う調査である。走櫓発掘調査については、昭和34年から実施されてきた復元整備事業の走櫓石垣復元に伴うものである。天球丸発掘調査は、長年孕み、崩壊の危険が懸念されてきた石垣の修理に伴うものである。

発掘調査年表

史跡整備事業の内容				
年度	事業主体	補助事業名	面積 (㎡)	事業内容
昭和	55	鳥取市	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業	走櫓第一回発掘調査
	56	鳥取市		走櫓第二回発掘調査
平成	2	鳥取市	320	天球丸第一次発掘調査
	3	鳥取市	530	天球丸第二次発掘調査
	7	鳥取市	545	天球丸第三次発掘調査
	9	鳥取市		太鼓御門発掘調査・山下丸平面図作成
	10	鳥取市		大手門・中ノ御門発掘調査
	12	鳥取市		楯蔵発掘調査
	15	鳥取市		鳥取城関連遺跡調査

発掘調査位置図



昭和55年度
昭和56年度
平成2年度
平成3年度
平成7年度
平成9年度
平成10年度
平成12年度
平成15年度
史跡範囲

S=1:4000
0m 1020 40 100 200m
(昭和58年作成 史跡指定範囲図をもとに作成)

□発掘調査概要

走櫓

調査年度	調査概要	検出 遺構・建物
昭和 55 年度 250 m ²	<ul style="list-style-type: none"> ・ 二ノ丸全域の礎石の配置実測 ・ 調査基準のグリッド設定 	
昭和 56 年度 130 m ²	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建物の新旧礎石が確認され、上下間隔は上層ピットの遺構面から 27 cm を計り、その地層は真砂土の客土である ・ 上下礎石で中心線はわずかにずれるが、柱間隔は上層礎石間隔と梁行において一致する ・ 新走櫓建物とそれに接した施設等の遺構の一部が見つかり、礎石等の抜取痕が多数確認されるが、その施設等の規模・規格の推計資料は得られる ・ 排水路は二ノ丸の敷地内を縦横に走っているものとみられ、発掘区北西部では曲折と合流を重ねている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 瓦片（池田家家紋の揚羽蝶紋が圧倒的多数、次いで三つ葉葵、三つ巴紋）

天球丸

調査位置	調査概要	検出 遺構・建物
平成2年5～7月 (第一次調査) 320 m ²	天球丸及びその周辺の現況調査から開始。天球丸一帯の平面測量、天球丸石垣の根石確認調査。 調査区北側から埋没した新規の石垣(石垣01)が検出。	陶磁器・土師質土器・瓦・鉄製品・銅製品・古銭・貝殻
平成3年8～12月 (第二次調査) 530 m ²	前年度に確認された新規石垣の東側拡張調査と、第一次調査区に続く南東部について行った。古階段の石段、石垣(石垣02)、建物跡、土坑等、多くの遺構が検出。曲輪の改変、拡張が行われていたことを裏付ける資料となった。	瓦は揚羽蝶文と巴文の2種類が出土
平成7年10～12月 (第三次調査) 545 m ²	天球丸の南東～東側を対象。 焼失した櫓跡、礎石等を新たに確認。上層から、櫓跡が発見されたため、建物の現状保存のため下層は未調査。	
上層：SB02	天球丸の南東 桁行9～10間、梁間4間の規模をもつ建物	
	建物跡2、ピット12、土坑28、溝16、列石3等があるが、近代の攪乱をかなり受けているようである。位置や規模から推察して、「鳥取城御住向之図」(年代不詳9)に描かれている「蔵」に該当するものと考えられる。万延元年(1860年)とされる鳥取城絵図に同様の建物をみることはできず、建物の時期は、江戸終末期と推定される。	
下層：SB03	天球丸の南東端 焼失した痕跡が顕著に認められる建物跡・梁間4間、桁行12間の規模をもつ建物	
	初段階から現在の曲輪形態に拡張されるまでの遺構と、拡張後の遺構が混在しているものと思われる。建物跡5、石段遺構1、石垣2、土坑24、溝17と、瓦溜り等の遺構が検出された。 鳥取城絵図(延宝8年)には、SB03と同位置に三階櫓が描かれている。この三階櫓は焼失したという記録があり、調査で確認した焼失痕跡と一致している。絵図から想定される規模、位置、また、焼失した痕跡から推察して、古図にみられる三階櫓に該当するものと思われる。	

天球丸の変遷

第1段階：石段遺構と石垣02が考えられる。石段遺構と石垣02によって曲輪が形成されていた可能性を前述したが、いずれにせよ、共に天球丸における古段階の遺構であることは明らかである。石段遺構の時期は明確に特定できないが、石段の裏込めから出土した陶磁器類と、石段遺構より後出の石垣01埋土から検出された唐津、備前等の遺物から16世紀末～17世前葉の時期が推定される。

第2段階：石垣01が構築された時期が考えられる。天保3年(1683年)とされる「鳥取城破損修覆図」からは、現在の曲輪に近い状態が見てとれる。この段階には曲輪の拡張がすでに完了していたものと思われる。

石垣 I～IV、VIIについて石垣基底部の確認と、裏込め状況調査を行った。

場所	根石～石垣上端までの高さ (m)	根石標高 (m)	裏込め幅 (cm)
石垣 I	8.5	41.10	下半：70～110 上半：105～200
石垣 I・II 隅部と II・III 隅部	11.7	38.20	平均：90～130 上位：200～230
石垣 III	11.2	38.40	平均：70～120 最大：240
石垣 IV	10m 前後	39.30	
石垣 VII(石垣 IV 下段の腰石垣)	4.2		石垣 V の下段腰石垣 (石垣 VIII) より先行して構築

太鼓御門

調査位置	調査結果	検出 遺構・建物
平成 9 年 8 月～9 月 170 m ²	<p>埋没していた石垣、井戸、石段の痕跡、列石を検出。</p> <p>調査区南西の井戸跡：石蓋が置かれ、周りに石積が施された状態で検出された。井戸の形状は概ね保たれており、直径 1.3m、深さ 5.55m あまり。この井戸の所在については、「島府志」の「丸ノ内下乗場之図」の中の「御前井」に該当するものと思われる。</p> <p>石段の痕跡：段を構成する石材は失われているが、地山面を掘削した痕跡が認められ、太鼓御門にいたる石段の存在を確認した。石段の間隔は 1.5～3.0m 前後と推定。門正面にいたる前面で、7 段の石段の所在が想定された。</p> <p>太鼓御門左石垣：右石垣の高さから推定して 7m 前後と推測。石垣の遺存部は根石から高さ 3m あまりであり、石垣上部の 1/2 以上が大きく失われていることになる。</p>	<p>瓦 (揚羽蝶文・巴文の軒丸瓦、花文・鳥禽・雁振の役瓦)</p> <p>陶磁器類 (唐津焼・浦富焼)</p>

中ノ御門

調査位置	調査結果	検出 遺構・建物
平成 10 年 10～12 月 135m	<p>門の改変前の状況、門を構成する石垣の遺存状況の把握、付施設等の存在確認を目的に行った。</p> <p>焼失した石垣の基部や、埋没していた石段、礎石等を検出することができた。正面石垣の幅は根石部分で 6.6～7.0m。「鳥取御城内手配之図」には同石垣の幅について「三間」と記されているが、これを天場の幅とみると規模的には概ね一致するものと考えられる。</p> <p>また、正面石垣の背面に描かれている階段は今回の調査で確認することはできなかったが、左側石垣の北面で検出した石段については絵図にみられる「雁木壱間半」と記述されている階段に相当するものと考えられる。この他、右側石垣の東面下で、台柱状の石を検出した。この石には非常に丁寧な加工が加えられており門櫓に伴う礎石と思われる。</p>	<p>瓦（揚羽蝶文、巴文の軒瓦、花文の中心飾りをもつ軒平瓦、道具瓦の鳥禽）</p> <p>陶磁器類（唐津焼の皿等）</p>

楯蔵

調査位置	調査結果	検出 遺構・建物
平成 12 年 12 月～ 平成 13 年 2 月 340 m ²	<p>櫓の規模は石垣の遺存状況からみて 2 間×3 間程度と推測される。</p> <p>楯蔵跡北東側に付設され、幅 4.2m、高さ 2.45m、段数 10 段を数える楯蔵に上がる石段が検出された。</p> <p>楯蔵跡の西面は高さ 7.5m あまりの石垣が築かれている。この石垣の上半部には、角石とみられる算木積みされた石積み状況が見られ、郭の拡張が行われていることがわかる。拡張は南北へ 6m、東西に 4m 程度を測る。この石段からは、天球丸腰郭の石垣に向かって武者走が築かれており、この武者走からは内側に積まれた石垣が検出された。良好な残存部で高さ 1.3m を測る。</p> <p>石段は楯蔵跡の北東側に付設され、幅 4.2m、高さ 2.45m、段数 10 段を数える。この石段から天球丸腰部の石垣に向かって武者走が築かれている。この武者走からは内側に積まれた石垣が検出された。かなり崩れ原状を失っていたが、良好な遺存部で高さ 1.3m あまりを測ることができる。武者走は楯蔵の石段左壁に取り付くものとみられるが、削平されておりその詳細は不明である。</p> <p>検出した武者走の石垣前面から送水施設を検出した。送水施設は長さ 40cm 前後、外径 16 cm、内径 10 cm 内外の土管をつなぎ合わせて溝内に配管している。配管は非常に丁寧で、接合部に乳白色の粘土を巻き、目張りを施している。造りの丁寧さなどから上水施設の可能性が考えられる。今回の調査では終端部を検出することができなかったが、土管を埋設した溝はさらに南西側に延びていくことから、郭内に送水施設に伴う遺構が存在することも予想される。</p>	<p>瓦（揚羽蝶文・三ツ巴文・三ツ葉葵文の軒丸瓦・道具瓦の鬼瓦、鳥禽瓦）</p> <p>陶磁器（伊万里・唐津・浦富焼）・焼塩壺・土管・金属製品（鉄釘・鉄玉・鉛玉・煙管・真鍮製の鉤形製品）</p>

5) 史跡整備事業

□史跡指定の経緯

鳥取城の構築物は明治維新後の明治 12 年に解体撤去された。明治 22 年に陸軍省より池田家にふたたび移管された。その後、山下ノ丸の広場には公共的施設が相次いで建設され、公共の場として大いに活用された。反面、広大な城跡の土地の大部分は、地形的制約があり、かつ池田家の私有地であったため、放置され荒れるに任せる状態となっていた。その上、昭和 18 年の鳥取大震災で、城跡各所で石垣の崩壊が発生した。昭和 19 年、鳥取市は池田家より城跡の土地全部の寄贈を受けた。

戦後、鳥取城跡の保存の機運が高まり、昭和 29 年、鳥取市は史跡指定を申請。指定までの間の保護措置として鳥取県教育委員会より史跡の仮指定を受けた。国の史跡指定により、昭和 18 年の鳥取大地震によって、崩壊または石積みの孕み出し等の変形を受け、荒廃したまま放置されていた鳥取城跡の石垣の復元修理、そして、史跡としてふさわしい環境整備事業が、昭和 34 年度から実施されてきた。

昭和 32 年 12 月 18 日 鳥取城跡のある東町地内と太閤ヶ平のある滝山・百谷地内
668,663 平方メートルが史跡指定

昭和 62 年 8 月 10 日 円護寺側 299,661 m²が追加指定、久松山ほぼ全山が指定
指定範囲 久松山ほぼ全山と太閤ヶ平 968,324 m²

□指定の理由

1. 織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係をもつ史跡であること。
2. 城跡の構成が、前期の歴史的推移と照応し、山城的形式を残す山上ノ丸と中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に高く評価されたため。

官報告示 文化財保護委員会告示第 91 号

文化財保護法第 69 条第 1 項の規定により、次のとおり指定する。

昭和 32 年 12 月 18 日 文化財保護委員会委員長 河井彌八

種別) 史跡 名称) 鳥取城跡 所在地) 鳥取県鳥取市東町

□史跡整備の経緯

昭和 59 年には「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画」を策定した。昭和 62 年には史跡追加指定を行い、昭和 63 年までに、地震で崩壊してしまった鳥取城の主たる曲輪である二ノ丸の三階櫓石垣、走櫓石垣、菱櫓石垣等の石垣の修理を優先して実施した。昭和 61 年には、これらの大規模な石垣修理が終了したため、平成元年度から平成 8 年度まで長年懸案となっていた天球丸石垣の修理を実施した。また、平成 12 年から楯蔵石垣の復元修理に着手しており、楯蔵石垣は石垣及び土塁石垣の復元を残すのみとなっている。平成 15 年度からは、天球丸石垣修理に着手し、現在も実施中である。

史跡整備事業年表

年度	事業主体	補助事業名	面積 (㎡)	事業内容
昭和 34	鳥取市	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業	143.2	三階櫓石垣修理
35	鳥取市	〃	58.0	〃
36	鳥取市	〃	66.5	〃
37	鳥取市	〃	58.0	〃
38	鳥取市	〃	42.4	〃
39	鳥取市	〃	83.0	〃
40	鳥取市	〃	71.04	〃
41	鳥取市	〃		西高校記念館裏石垣修理
42	鳥取市	〃		環境整備 (二ノ丸石段積替・側溝修理・擬木柵設置)
43	鳥取市	〃		環境整備 (天球丸側溝修理・説明版・標柱設置)
44	鳥取市	〃		環境整備 (山上ノ丸石段通路柵・山下ノ丸石段側溝整備等)
45	鳥取市	〃		環境整備 (山上ノ丸道路整備・坂口御門石垣整備等)
46	鳥取市	〃	23.8	環境整備 (宝隆院庭園整備・坂口御門石垣復元)
47	鳥取市	〃		宝隆院庭園整備・内濠浚渫
48	鳥取市	〃		内濠浚渫・堀石垣補修
49	鳥取市	〃		〃
50	鳥取市	〃		米蔵跡整備 (民家・動物舎移転補償)
51	鳥取市	〃		米蔵跡整備
52	鳥取市	〃		〃
53	鳥取市	〃	163.8	大菱櫓跡石垣整備
54	鳥取市	〃	59.3	走櫓石垣修理 (石垣解体)・渡御門石垣修理
55	鳥取市	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業	140.5	走櫓石垣修理・発掘調査 (380 ㎡)
56	鳥取市	〃	117.6	走櫓石垣修理
57	鳥取市	〃	304.0	走櫓石垣修理・環境整備
58	鳥取市	〃		菱櫓修理 (解体)・史跡図化
59	鳥取市	〃	123.5	菱櫓修理・史跡管理計画報告書作成
60	鳥取市	〃	180.0	菱櫓跡石垣修理
61	鳥取市	〃	158.8	菱櫓跡石垣修理
62	鳥取市	〃		環境整備 (史跡指定地境界杭設置・史跡図化追加)
63	鳥取市	〃	66.0	石垣復元 (二ノ丸三階櫓下段部石垣修理)
平成元	鳥取市	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業		天球丸石垣修理 (測量図化)
2	鳥取市	〃	72.0	環境整備 (史跡指定地境界杭設置・史跡図化追加)
3	鳥取市	〃	72.0	石垣復元 (二ノ丸三階櫓下段部石垣修理)

年度	事業主体	補助事業名	面積 (㎡)	事業内容
平成 4	鳥取市	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業	129.0	天球丸石垣修理
5	鳥取市	〃	76.0	〃
6	鳥取市	〃	214.0	〃
7	鳥取市	〃	206.0	〃
8	鳥取市	〃	164.0	〃
9	鳥取市	〃	149.0	扇亭石垣修理・太鼓御門発掘調査・山下丸平面図作成
1 0	鳥取市	〃	114.0	太鼓御門石垣修理・中ノ御門発掘調査
1 1	鳥取市	〃	103.4	太鼓御門石垣修理
1 2	鳥取市	〃	130.0	楯蔵石垣修理 (発掘調査・石垣解体修理)
1 3	鳥取市	〃	107.0	楯蔵石垣修理 (石垣解体修理)・山下ノ丸 (石垣測量・解体)
1 4	鳥取市	〃	277.0	楯蔵石垣修理 (石垣解体修理)・天球丸石垣写真測量
1 5	鳥取市	〃	100.0	楯蔵石垣修理 (石垣修理)・天球丸石垣解体
1 6	鳥取市	〃	210.0	天球丸石垣修理 (石垣解体修理)・測量

3. 現況分析

1) 景 観

現在の鳥取市の中心市街地は、近世前期に鳥取城跡を中心に計画的に造成された城下町を原型としている。この造成工事は、池田光政が鳥取藩主となった2年後の元和5年に、日置豊前の指図によって行われたと言われる(『因幡民談』)。当初は空き地も多かったが、次第に建てこんでゆき、初代鳥取藩主・池田光仲襲封ののちは周辺村落部にも都市化が進行するようになっていった。

この城下町は、武家屋敷と町人町・寺院を計画的に配置したもので、久松山及び鳥取城の建造物群との相互の見通しを意識して計画されている。山上の天守(池田長吉により桧皮葺二層に改修された)、天球丸、二ノ丸への山下からの眺望、また、鳥取城からの城下への眺望はかなり計算されたものであったと思われる。これは平面形からの読み取りのみでなく、智頭橋もとにあった札場からやや久松山に寄った辺りの町屋について、藩が修景のための指示を出していることなどが、その傍証として挙げられる。いずれにせよ、久松山の存在が、「山当てのビスタ」という城下町・鳥取の歴史景観の特徴を決定付けているものと思われる。近代以降においても、絵葉書類・書籍類など、久松山をランドマークとしたものは枚挙に暇がない。

現在、鳥取市は「久松山山系景観保全地域基本方針」を策定し、景観の保全に努めている。

景観分析は、鳥取城跡と城下町の間を、鹿野、智頭、若狭三街道より久松山(鳥取城跡)の景観及び逆に鳥取城跡より城下町の景観及び太閤ヶ平と山上ノ丸の関係についてまとめた。

(景観分析写真位置図及び景観分析表1～3参照)

城下町より久松山の景観は、千代川よりの遠景から国道53号線よりの近景に至るまで存在感を持って視界に入ってくる。しかし、近年建築の高層化により視界が遮られている個所が随所に見られる。特に智頭街道の正面には地方裁判所があり、近景視界を著しく阻害している。

久松山山系景観保全地域は、現在片原通りまでとなっているが、若桜・智頭・鹿野街道の街道筋だけでも、旧袋川まで拡大し鳥取市内より久松山への景観を保全すべきであると思われる。

また、山上ノ丸より鳥取市内を眺めると市内は一望の下で、三街道により形成された城下町が理解できる。しかし、山下ノ丸に下ると手前に県立鳥取西高奥の方に県庁他公官庁の高層建築が著しく景観を阻害している。また城内の樹木も景観を阻害している個所が見られる。

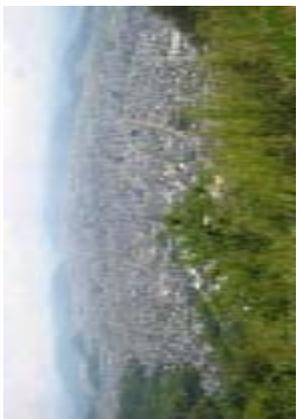
景観分析表 - 1

スカイライン

	鹿野街道	智頭街道	若桜街道	評価
旧29号線	 <p>1</p>	 <p>2</p>	 <p>3</p>	<p>久松山との距離 : 750m 仰角 : 19.5。 久松山は山の斜面傾斜が約35度で、傾斜が崖に近いため、山腹斜面が壁立的に立ち現れてくる。山下ノ丸正面でありながら、視点の目の前の裁判所、県庁によって久松山が隠れてしまっている。樹木1本1本のアウトラインを確認できる。</p>
片原通り	 <p>4</p>	 <p>5</p>	 <p>6</p>	<p>久松山との距離 : 1100m 仰角 : 13。 スカイラインと山腹を交互に見て、樹木1本1本のアウトラインを確認できる好ましい距離だが、若桜街道の商店街、官公庁、商業サインが久松山と重なり、視線が阻害される。</p>
旧袋川	 <p>7</p>	 <p>8</p>	 <p>9</p>	<p>久松山との距離 : 1600m 仰角 : 9.5。 片原通り同様久松山が正面にみえる。樹木1本1本のアウトラインの確認はできず、市街地の背景的な役割を果たす。</p>
駅前	 <p>10</p>	 <p>11</p>	<p>久松山との距離 : 2100m 駅前からは、ビルルの間に久松山が見え、ビスタポイントになっている。</p>	

		評価	
千代川	千代太橋 12		久松山との距離 : 2500m 仰角 : 5.5~6。 スカイラインが視覚的に卓越している。平遠の景の典型。独立峰により、ひきたった興味の対象となり、ランドマークとしての役割を果たす。千代川沿いからでも、独立峰の久松山がひと目で分かる。また、八千代橋からは、久松山と太閤ヶ平の鉄塔が重なって見ることができ
	千代川河川敷 13		
久松山北西 旧袋川	15		久松山との距離 : 1200m 仰角 : 12。 川の蛇行によって、久松山の見え方が変化する。スカイラインと山腹を交互に確認できる。
	旧袋川湯所橋 17		
城下町	18		久松山との距離 : 1100m 仰角 : 13。 樹木1本1本のアウトライン、久松山の急斜面を確認できる。城下町の名残を残す江崎町からは、江戸時代の面影を残す住宅と背後に久松山を重ねて見ることができ
	19		
20			
総評	久松山山系景観保全地域は、片原通りまでであるが、若桜・智頭・鹿野街道の街道筋だけでなく、旧袋川まで、入れるべきである。眺望において、久松山は存在感をもっており、鳥取市街地のシンボルとなっている。しかし、市街地に残る城下町の骨格である若桜・智頭・鹿野の三街道からの視線が、高層建築・商業サイン等で阻害されつつある。		

景観分析表 - 3

		評価	
久松山・山上ノ丸			市街地を見下ろすと、市街地全体から湖山池、日本海まで見渡せ、城下町の都市構造・骨格である、若桜・智頭・鹿野街道の街道筋が理解できる。
山下ノ丸			山下ノ丸の二ノ丸から市街地方向を見下ろすと、向かって左手に県立鳥取西高校の屋上が、正面に久松小学校、右手には仁風閣、県立博物館が見える。内堀は樹木の繁茂、鳥取西高校が障子となり見えづらい。
十神岩			
太閤ヶ平			太閤ヶ平・変電所付近から、樹木によって見えにくくはあるが、久松山を見通すことができる。久松山と太閤ヶ平を見通せることで、秀吉の鳥取城攻略の状況が伝えられる。

場所	景観	施設・利用状況	石垣・樹木	法規制・管理
天守櫓跡		<ul style="list-style-type: none"> ・鉄骨の階段が周辺と調和していない ・天守櫓跡には、勝手に花壇が作られている ・部分的に柵がなく、土地に傾斜がかかっている危険である 	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣が崩れており危険である ・天守櫓跡は、遺構の石が整備されず、点々としており、つまりまきそで危険である 	
本丸	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取市街から、千代川河口、日本海、鳥取砂丘が一望できる ・鳥取市街に残る城下町の都市構造、若松、智頭、鹿野3街道が認識できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・望遠鏡が壊れている 	<ul style="list-style-type: none"> ・本丸の隅石垣が崩れかかっている 	
二ノ丸 三ノ丸	<ul style="list-style-type: none"> ・階段脇の樹木、低木が茂っており、本丸、二ノ丸間の見通しが悪い 	<ul style="list-style-type: none"> ・山頂にあるためか、管理が行き届いていない ・山道の照明が壊れている ・旧民間ロープウェイ乗り場は、老朽化が進み、ごみが捨てられている ・二ノ丸には鉄筋コンクリート、なまこ壁の休憩所があるが荒れ放題である ・瓦の残骸、汚いベンチ、テールブルが雰囲気を悪くしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイキング道から本丸を見上げると、石垣が崩れかかっている ・旧民間ロープウェイ乗り場は、老朽化が進み、ごみが捨てられている 	
天球丸	<ul style="list-style-type: none"> ・市街方向を見ると、西高のフラット屋根が見え、内堀は見えない ・内堀方向を見ると、大手門、表御門跡が見えると同時に、鳥取西高校のネット、グラウンド照明も目に入る ・二ノ丸方向を見ると、階段を抜んで、石垣がそびえ立って見える ・菱櫓跡方向を見ると、仁風閣、走櫓跡、菱櫓跡が重なって見える ・市街遠景には、連続する山並みが見える 	<ul style="list-style-type: none"> ・天球丸下と西高校の間に設置されたベンチが、雑草、樹木に覆われ、使用できない ・天球丸と二ノ丸への導線がわかりにくく 	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣の間から生えた雑草が目立つ ・天球丸では老松が目印になっている ・西高校、天球丸間には、樹木が生い茂っており、境界や、石垣の管理があまりいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・史跡範囲内の民家が、工事中の石垣と隣接しており、危険である
二ノ丸	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣の重なり、石垣の間をぬって歩くことで平山城らしさが伝わる ・仁風閣との境界に張り巡らされている青ネットが、遠くからも確認でき、景観を損なっている ・二ノ丸から下を見下ろしても、樹木（仁風閣境界等）、鳥取西高校があり、内堀まで見えない ・二ノ丸からは、仁風閣が正面真下に見える ・山上ノ丸から下りてきてまず目に入るのが、西高の屋上であり、城郭らしさに欠ける ・樹木、西高校により菱櫓跡から、市街が見通しにくい ・二ノ丸から江崎町方面を見ると、鳥取西高校、県庁が重なって見え、市街方向正面には久松小、法務局、高層マンションが見える。 ・二ノ丸の電線が架空線になっており、目立つ ・走櫓跡下から、上を見上げると、照明の頭が見える 	<ul style="list-style-type: none"> ・二ノ丸への導線が、工事中のためではあるが、階段が壊されており、登りにくい ・工事中のためのエントランス変更のサインが、わかりにくい ・二ノ丸の電線が架空線になっており、目立つ。更に電線の高さが低く、目に入りやすい ・表御門跡の礎石が残っているが、表御門前井戸跡のサイン表示がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・二ノ丸は桜の木が多く植えられ、城跡内の見通しがあまり良くない ・二ノ丸下通路には石垣が崩壊しかけ、剥離、根石が割れているところがある ・表御門跡から二ノ丸に入る際、サクラの木が正面にあり、視界が通らない ・三階櫓跡横の石工、奉行名の彫られた石牌が割れている 	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取西高校から、大手門にぬける一本道は桁形のため、カーブしており、視界が悪いが、車画、生徒、観光客が混在しており、危険である ・名称、設置者の不明な門がある（県博御入口）
三ノ丸	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取西高校表門前から二ノ丸走櫓跡石垣の角が見える 	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取西高校の部屋プレハブが大手筋正面に建っている ・中ノ御門正面のグラウンドネット、グラウンド照明が目立つ ・三ノ丸のサインが、西高入口の低木で隠れてしまっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣の間から生えた雑草が目立つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・工事中の為、二ノ丸への階段はなく、登りにくい

現況分析表—1

現況分析表ー2

場所	景観	施設	石垣・樹木	法規制
大手筋	<ul style="list-style-type: none"> 大手正面に鳥取西高校の部室プレハブが見える 鳥取西高校のグラウンドのネット、グラウンド照明が目立つ 仁風閣裏口の樹木で、二ノ丸が見えないが、樹木の上に少しだけ菱櫓のぞく 	<ul style="list-style-type: none"> 鳥取西高校のプレハブ、ネット、照明が建っており、大手らしさに欠ける 	<ul style="list-style-type: none"> 石垣の上に樹木があるが、樹木が大きく、石垣が崩れない心配である 石垣の間から生えた雑草が目立つ 内堀沿いにマツがあるが、枝が垂れ下がり、歩きにくい 	
	<ul style="list-style-type: none"> 米蔵跡からは二ノ丸石垣が良く見えるが、所々、樹木、電柱に邪魔され、石垣の連続性が途絶える 現在、二ノ丸下に青ネットがかかっており、景観を損なっている 電線と仁風閣、石垣が重なって見える 	<ul style="list-style-type: none"> 公共トイレ前では、人が集まって待機をしている 花壇・植え込みによって、せまい印象を受け、通りぬけしにくい 鳥取西高校生徒が部活をしている 花壇は、米蔵の建物跡を示しているが、そのことが伝わりにくい 	<ul style="list-style-type: none"> 石垣の上の樹木が大きくなり、石垣が崩れる恐れがある 	
	<ul style="list-style-type: none"> 内堀沿いの合間から、二ノ丸三階櫓跡の石垣が良く見える 歩道と内堀を仕切る植え込み、樹木で、堀沿いに歩かず、二ノ丸の石垣が見えにくい 	<ul style="list-style-type: none"> サイインの種類、素材、形態が多種で統一感がない 		
北ノ御門跡 城代屋敷跡		<ul style="list-style-type: none"> 県立博物館へのイベントララシがある 現在、県立博物館が建っている 		<ul style="list-style-type: none"> 車阿は、山の手通りの歩道を横切って、博物館の駐車場へ入っていくため、危険である 県庁前の道は、歩車分離がしっかりとされており危険である
扇邸跡		<ul style="list-style-type: none"> 現在、国指定重要文化財・仁風閣が建っている 仁風閣から三階櫓跡の石垣がよく見えるが、敷地境界の青ネットが景観を損なっている 	<ul style="list-style-type: none"> 仁風閣裏（二ノ丸との境界）の樹木が繁茂し、山下ノ丸下から二ノ丸石垣が見えづらい 	
太閤ヶ平	<ul style="list-style-type: none"> 現在、太閤ヶ平横から、久松山が見えるが、樹木の繁茂により、土塁から久松山への眺望が妨げられている 	<ul style="list-style-type: none"> 石碑の表示に間違いがある 無線中継所とのかねあいをどうするか イベントララシ位置が不明である 樽窯から太閤ヶ平までは登る人が多く、ハイキングの折り返し地点になっている 	<ul style="list-style-type: none"> 笹などの雑草で荒れているため、堀と土塁跡がわかりにくくい 樹木で眺望が妨げられているため、谷をはさんで位置する久松山が見通しにくい 今後、さらに荒れていくと予想されるので、樹木整理、雑草の処理塔、早めの対策が必要である 樹木の根が張り出し、がけ崩れが起きそうな場所がある 	<ul style="list-style-type: none"> 史跡範囲の不明確な部分、不足部分、拡大の検討
西坂道 中坂道 東坂道		<ul style="list-style-type: none"> 登山道の段差が大きく歩きづらい 手すりが、鉄パイプのものであったり、木製であったり、統一されていない 西坂入口のサイインはあるが、登山道の整備はされていない 		
十神岩	<ul style="list-style-type: none"> 摩尼山方面、北園ニュータウン、鳥取砂丘、千代川河口、日本橋が見える 	<ul style="list-style-type: none"> 展望スペースは1層ほどだが、穴場ポイントらしくて良い 細い山道を抜けて、巨石や、展望スポットが現れる 		
標路～ ハイキン グ道	<ul style="list-style-type: none"> やまびこ館前の道路が神社の参道になっており、樹木の間に歩くと、正面鳥居のピスタが効いており、雰囲気が良い 山頂に着くまでにも、木々の間から市街が臨める 	<ul style="list-style-type: none"> 鳥居をスタートにして、ハイキングをしようとする人が多い 鳥居が起点になっているようだが道標の起点が不明確である 設置者が不明なバーゴラ、ベンチがある サイインが壊れているもの、情報が古いもの、多種のサイインが混在しており、どのサイインが正しいのかわからない 	<ul style="list-style-type: none"> 池（ピオトーブ、堆砂）や植物が荒れているところは整理が必要である 樹木の根が張り出し、がけ崩れなど危険な箇所がある 	<ul style="list-style-type: none"> やまびこ館前の道が、歩車分離されているが、実際、歩行者と車の出入りが混ざっており、危険を感じる 設置団体によって、情報が異なり、利用者が戸惑う

天守櫓跡

- ・天守櫓跡に遺構に花壇が造られている
- ・礎石跡らしき石が転がっており、危険である
- ・石垣が崩れて、放置されており危険である
- ・周辺と調和していない錆びた鉄骨階段がかかっている



壊れて、使えない望遠鏡 / 崩れた石垣



- 二ノ丸**
- ・民間の休養施設が廃屋となり、割れた瓦、壊れた照明が放置されている
 - ・民間のロープウェイ施設も、廃屋となっている



樹木が生い茂り、本丸・二ノ丸間の見通しが悪い
石垣の崩れが目立つ



東城道から山上ノ丸入口の虎口石垣の崩れが目立つ



本丸全景



本丸の隅石の崩れが目立つ

- 本丸**
- ・ベンチ・藤棚・望遠鏡などが配置されているがあまり使われていない
 - ・車井戸跡がある
 - ・サクラなど樹木が過密に植えられており、また電柱も目立ち、見通しが悪い
 - ・山下ノ丸から山上ノ丸を目指して登山する人が多い
 - ・市街地を一望でき、城下町の都市構造がわかる
 - ・壊れた望遠鏡、崩れた石垣が散乱している

(昭和58年作成 史跡指定範囲図をもとに作成)

鳥取城跡山上ノ丸 現況

鳥取城跡山下ノ丸 現況



架空電線が目立つ



通路沿いの崩落石垣は危険である



内堀石垣に樹木が生育しており、石垣管理上良くない



北ノ御門跡は県立博物館のアプローチとなっている



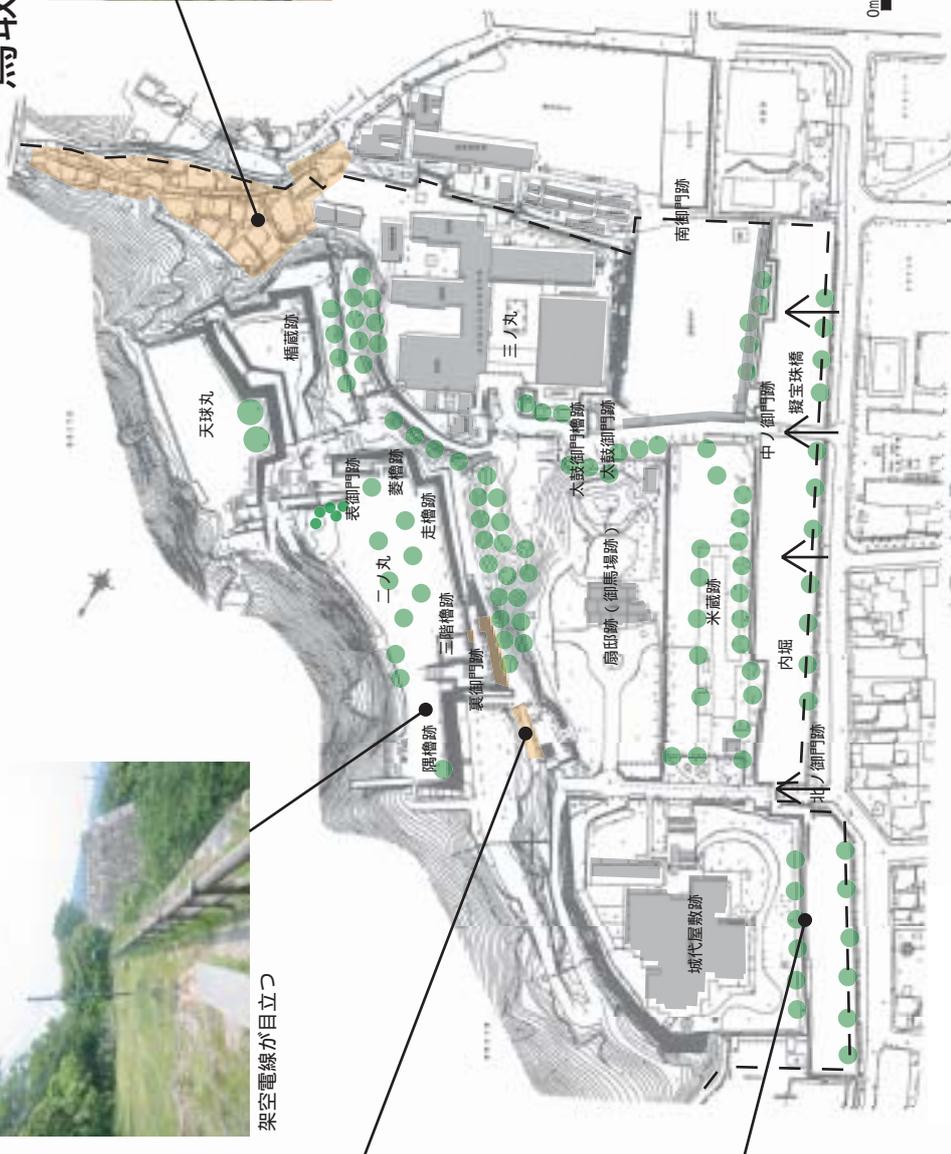
内堀から仁風閣は望めるが、二ノ丸石垣は樹木により見えにくい。また、植え込み等が多く、城を眺めながら内堀沿いに歩きにくい。



大手筋・中ノ御門跡正面は鳥取西高部室、体育館が建っており、大手らしさを損なっている



鳥取西高のバックネット、照明灯が目立つ



史跡範囲

S=1:4000

0m 10 20 40 100 200m



史跡地内民家と石垣修理箇所は接近しており、十分な安全対策が必要である

(平成10年作成 山下ノ丸地区測量図をもとに作成)

太閤ヶ平 現況



遺構
遺構が樹木に覆われ、土塁、堀の確認ができず、
史跡であるとわかりにくい



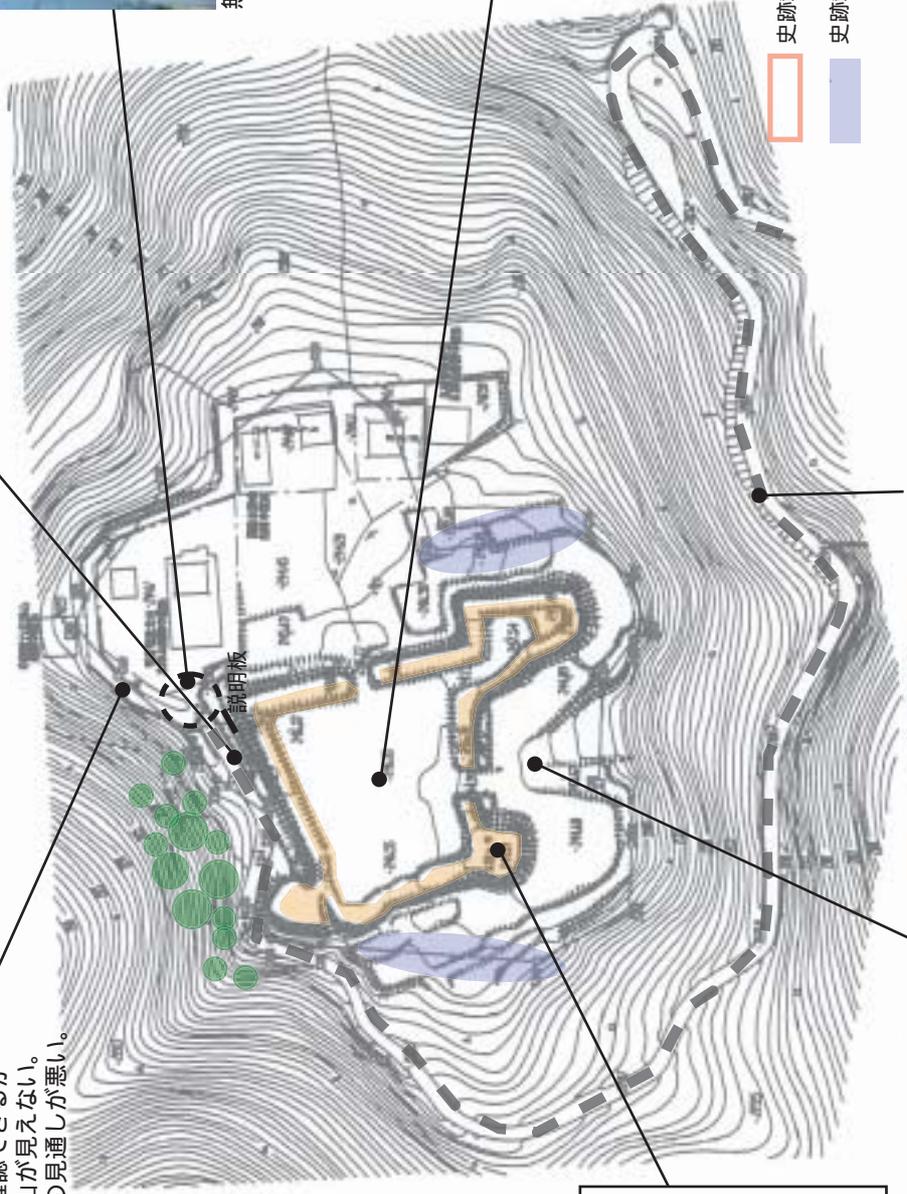
中継所前からは久松山の頂上が確認できるが
土塁からは樹木によって、久松山が見えない。
樹木により、久松山 - 太閤ヶ平の見通しが悪い。



無線中継所と太閤ヶ平



笹、樹木によって荒れている



史跡範囲
史跡範囲拡大検討

ハイキング道
太閤ヶ平は樽路からスタートしてハイキングに
来る人の折り返し地点になっている。

往時（秀吉の鳥取城攻め）の際の
大手の位置

石碑
石碑の文字が間違っている

天正九年秀吉鳥取城
攻略本陣址 太閤ヶ平



S=1:3000

（昭和58年作成 史跡指定範囲図をもとに作成）

3) 史跡の利用状況

① 鳥取城跡の利用状況

鳥取城跡は、国指定史跡及び都市公園（歴史公園）にも指定されている。

山下ノ丸山裾には、県立博物館、国指定重要文化財の仁風閣、県立鳥取西高校がある。

内堀と隣接して、米蔵跡を中心とした久松公園があり、市民の憩いの場として利用されている。

春には、山下ノ丸の二ノ丸には桜が咲き誇り、桜の名所として多くの市民に親しまれている。普段は、久松山を散歩、ハイキングとして利用する人が多く、歴史的価値を伝える場としての印象は薄い。

史跡鳥取城跡に隣接して禰園公園が南に位置するが、この禰園（禰園公園）より太閤ヶ平を経て久松山に登り、山下ノ丸に至るハイキングコースは、延長約7kmである。このコースは単なるハイキングコースではなく、鳥取の歴史探訪としても最適である。

山下ノ丸～山上ノ丸は15～20分、山下ノ丸～禰園は3時間の手軽なコースである。



② 都市公園としての利用状況

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平は、太閤ヶ平を除き都市部側は「都市公園（歴史公園）」に指定され、一定の整備、利活用がなされている。

米蔵跡にはトイレが設けられているほか、ベンチ類が適宜配置されている。桜の木が植樹され、春先には花見客で賑わうほか、「32 万石お城祭り」の会場としても利用されている。

二ノ丸にはトイレが設置されているが、照明灯と、花見の季節のライトアップ・提灯灯火のための電線が架空線になっている。また、ゴミ箱が設置され、都市整備部が管理している。

二ノ丸、内堀沿いでは、樹木により見通しの悪い箇所が見られる。

鳥取城跡内イベント表

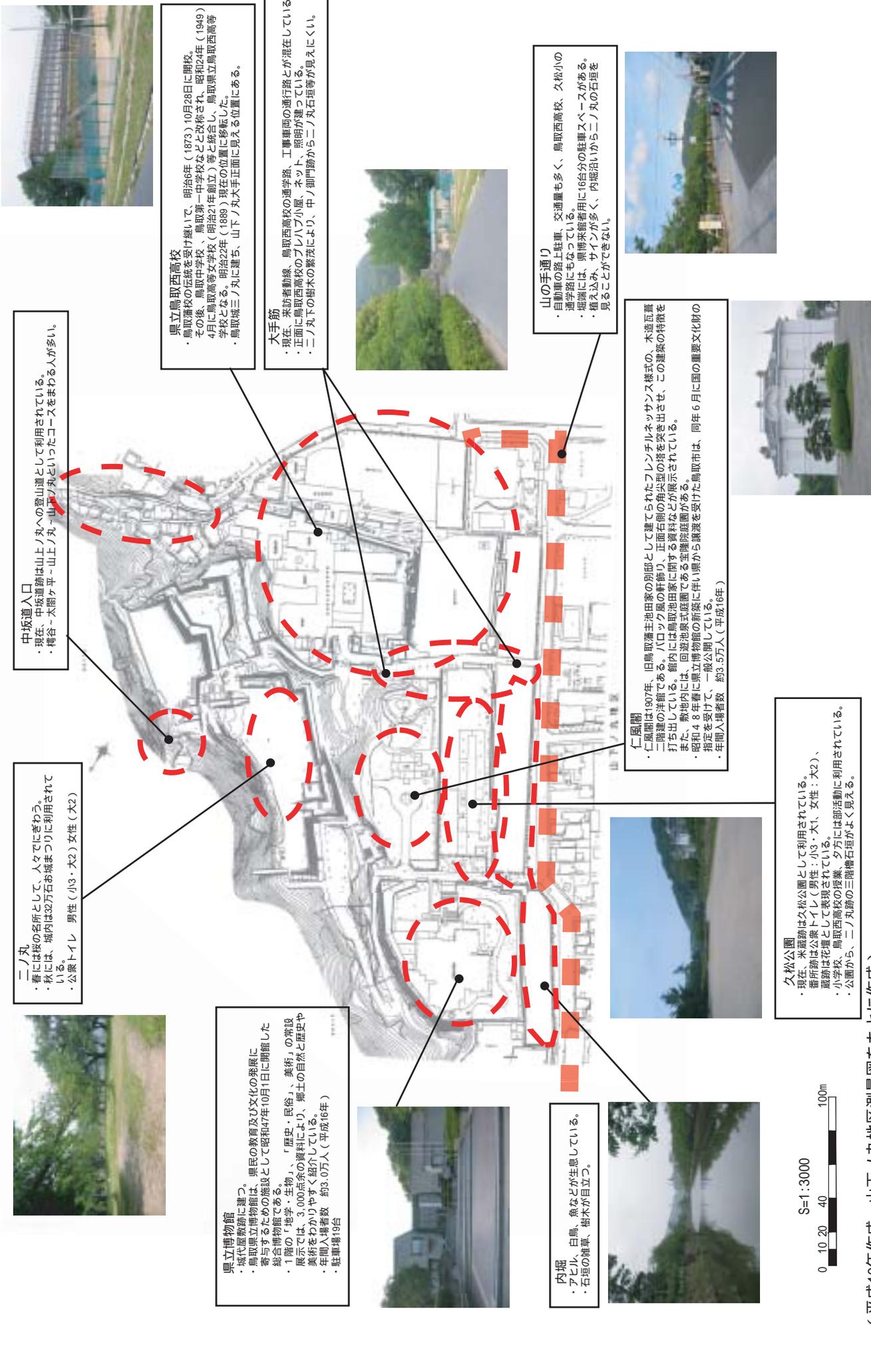
イベント名	概要
桜祭り	城内の桜を楽しむ
32 万石お城まつり	鳥取城跡・久松山をテーマとした一大イベント <ul style="list-style-type: none"> ・ 二ノ丸の復元イメージ風船 ・ 山上ノ丸ライトアップ ・ 久松山ウォークラリー ・ 模擬合戦 ・ 智頭橋たもとでのイベント開催
県立博物館 「鳥取城探検隊」	小中学生対象の鳥取城跡見学会 ※その他にも市民による自主的なイベント等に利用されている

③ 史跡周辺の利用状況

鳥取城跡周辺の土地利用をみると、山下ノ丸南西には、県庁、警察署、裁判所、市役所といった官公庁が密集し、また、北側には中学校、西側には小学校、南側には高校があり、文教地区でもある。

鳥取駅と久松山を結ぶ若桜街道は、商業施設区域として鳥取市の都市機能地区となっている。

山下ノ丸 現況利用図



二ノ丸
 ・春には桜の名所として、人々でにぎわう。
 ・秋には、城内は32万石お城まつりに利用されている。
 ・公衆トイレ 男性(小3・大2) 女性(大2)



中坂道入口
 ・現在、中坂道跡は山上ノ丸への登山道として利用されている。
 ・樽谷～太閤ヶ平～山上ノ丸～山下ノ丸といったコースをまわる人が多い。



県立博物館
 ・城代屋敷跡に建つ。
 ・鳥取県立博物館は、県民の教育及び文化の発展に寄与するための施設として昭和47年10月1日に開館した総合博物館である。
 ・1階の「地学・生物」、「歴史・民俗」、「美術」の常設展示では、3,000点余の資料により、郷土の自然と歴史や美術をわかりやすく紹介している。
 ・年間入場者数 約3.0万人(平成16年)
 ・駐車場19台



内堀
 ・アヒル、白鳥、亀などが生息している。
 ・石垣の雑草、樹木が目立つ。



県立鳥取西高校
 ・鳥取藩校の伝統を受け継いで、明治6年(1873)10月28日に開校。
 ・その後、鳥取中学校、鳥取第一中学校などと改称され、昭和24年(1949)4月に鳥取高等女学校(明治21年創立)などと統合し、鳥取県立鳥取西高等学校となる。明治22年(1889)現在の位置に移転した。
 ・鳥取城三ノ丸に建ち、山下ノ丸大手正面に見える位置にある。



大手筋
 ・現在、来訪者動線、鳥取西高校の通学路、工事車両の通行路とが混在している。
 ・正面上に鳥取西高校のアリハブ小屋、ネット、照明が建っている。
 ・二ノ丸下の樹木の繁茂により、中ノ御門跡から二ノ丸石垣等が見えにくい。

山の手通り
 ・自動車の路上駐車、交通量も多く、鳥取西高校、久松小の通学路にもなっている。
 ・堀端には、県博来館者用に16台分の駐車スペースがある。
 ・植え込み、サインが多く、内堀沿いから二ノ丸石垣を見ることができない。



仁風閣
 ・仁風閣は1907年、旧鳥取藩主池田家の別邸として建てられたコレンチルネッサンス様式の、木造瓦葺二階建ての洋館である。八ッ角の角柱の隅柱の塔を突き出させ、この建築の特徴を打ち出している。館内には鳥取池田家に閉する資料などが展示されている。
 ・また、敷地内には、回遊池泉式庭園である玉隆院庭園がある。
 ・昭和48年春に県立博物館の新築に伴い県から譲渡を受けた鳥取市は、同年6月に国の重要文化財の指定を受けて、一般公開している。
 ・年間入場者数 約3.5万人(平成16年)



久松公園
 ・現在、米蔵跡は久松公園として利用されている。
 ・番所跡は公衆トイレ(男性:小3・大1、女性:大2)、蔵跡は花壇として整備されている。
 ・小学校、鳥取西高校の授業、夕方には部活動に利用されている。
 ・公園から、二ノ丸跡の三階櫓石垣がよく見える。

(平成10年作成 山下ノ丸地区測量図をもとに作成)

4. 史跡の現況のまとめ・整備課題

現況のまとめ・整備課題		
位置と地形	<ul style="list-style-type: none"> 久松山と直線距離 1.5km 離れた太閤ヶ平（飛び地指定）との往時の位置関係が、樹木の繁茂により視界を遮られ、理解しにくい。 久松山は、急傾斜の山腹を持ち、独立峰をなしており、周辺を見渡せ且つ周辺より目立つ存在である。 現在の鳥取市街地は、江戸時代、久松山鳥取城を基点に形成された城下町を踏襲した都市構造になっている。 	
自然	<ul style="list-style-type: none"> 久松山は市街地に隣接する貴重な自然である。 キマダラルリツバメチョウの生息地が天然記念物に指定されている。 	
土地所有管理 法規制	<ul style="list-style-type: none"> 史跡所有管理区分が複雑（鳥取県・鳥取市・国有地等）で、施設整備・管理等の統一が図られていない。 	
景観	<ul style="list-style-type: none"> 内堀沿いから、山下ノ丸を見ると、山下ノ丸山裾の鳥取西高校、仁風閣および県立博物館の建物が目立ち、城郭景観が損なわれている。 樹木の管理が充分行われず、史跡内で見通しが悪く利用しにくい個所がある。 石垣景観が、樹木に繁茂により阻害されている個所がある。 鳥取市内において久松山は、千代川からの遠景、三街道（若桜・智頭・鹿野）、片原通りからの近景いずれも特徴的なランドマークになり、鳥取市のシンボルである。 	
利用状況	<ul style="list-style-type: none"> 樗谿から太閤ヶ平（本陣山）を経て山上ノ丸、山下ノ丸に至るハイキングコースを利用している人が多い。 桜の季節の花見、32万石お城まつり以外で、史跡を利用したイベント等の試みがあまり行われていない。 久松公園は、主に山下ノ丸（米蔵跡など）を利用し、ベンチ、公衆トイレ、花壇等配置されている。 大手筋は、来訪者見学導線、鳥取西高校通学路・車両、石垣修理工事用車両と重複し、歩車分離されていない。 	
既存施設	仁風閣	<ul style="list-style-type: none"> 整備設定年代より後世の洋風建築であるが、重要文化財に指定された建造物であり、移築することができない。
	県立鳥取西高校	<ul style="list-style-type: none"> 整備設定年代より後世の施設であり、三ノ丸に位置する。 城跡大手正面にグラウンド、体育館が建っており、天球丸石垣等を隠し、城跡景観を損なっている。
	県立博物館	<ul style="list-style-type: none"> 整備設定年代より後世の施設であり、城代屋敷跡に位置する。 博物館利用車両導線と歩行者導線が重複している。

※法規制における「鳥取市」は「教育委員会（文化財課）」「都市整備部（公園街路課）」「農林水産部（林務水産課）」で分担管理